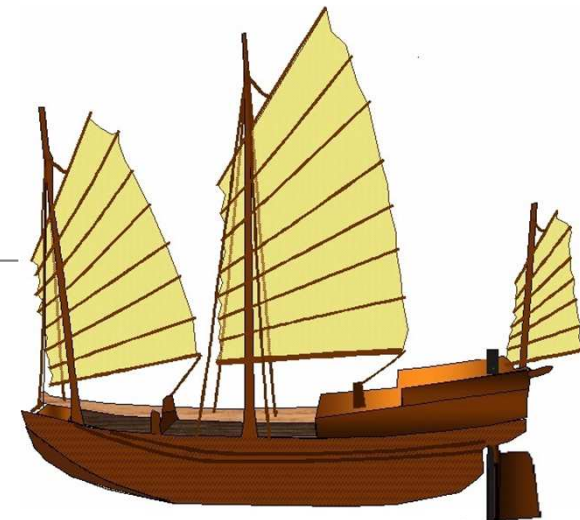


第50回古代史を解明する会



「邪馬台国論争の解明」

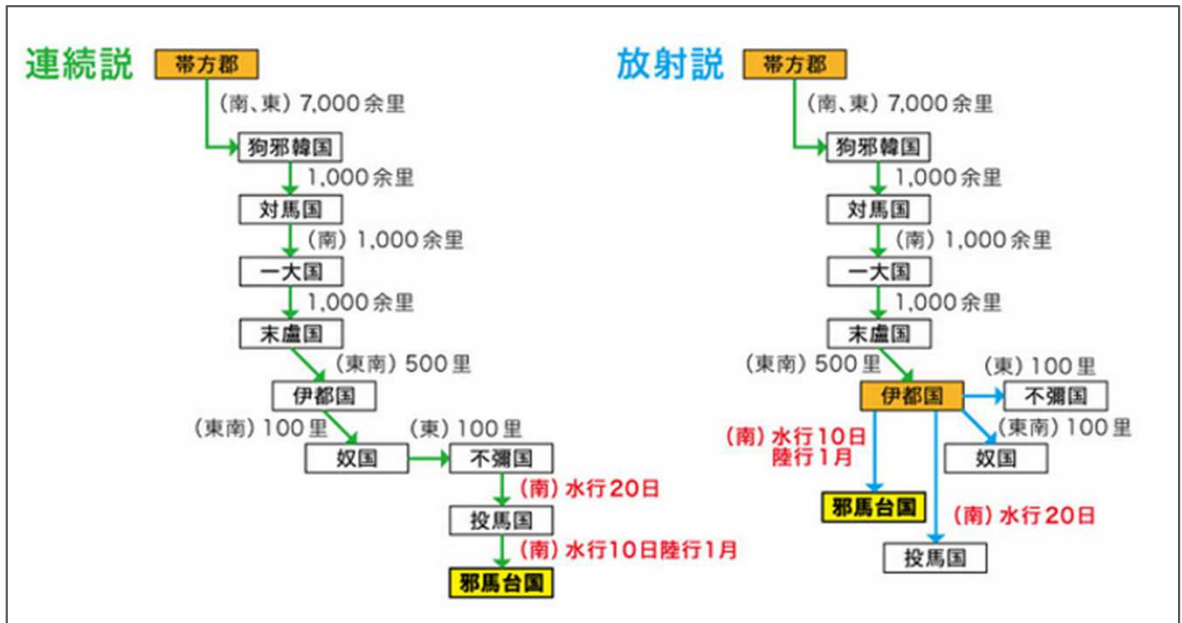
2025年5月3日
丸地三郎

- 「古代史を解明する会」では、邪馬台国関連をテーマに選び、開催してきた。
 - 第 4回 2020/3/27 「邪馬台国論」-邪馬台国の探し方-
(位置・距離・方位だけでない探究の要件)
 - 第10回 2021/9/25 「邪馬台国論」-「唐津上陸説に根拠はあるか？」
 - 第16回 2022/4/16「卑弥呼の使者を迎えた中国・魏の外交情勢」
- 今回は、『3百年つづく邪馬台国論争の終結』を目的にいたします。
 - 邪馬台国論を論じた新井白石は、1725年6月29日に亡くなっています。
 - 2025年5月は、まさに300年です。

-

- 3月15日の「古代史を解明する会」では、清水さんは、邪馬台国論争を取り上げた。

1. 「邪馬台国」とは何か
2. 邪馬台国問題はなぜ重要か
3. 邪馬台国論争の争点
4. 研究・論争の歴史
5. 鷲崎弘朋の邪馬台国論
6. 邪馬台国と記紀神話
7. 日本国家の起源と古代国家の形成



動画で、3月15日の「古代史を解明する会」を見た方のコメント：

- 畿内説も九州説も矛盾だらけなのに、論争にこれ以上時間を費やす意味がありますか？

邪馬台国は探せない！

「魏志倭人伝」から邪馬台国の位置は読み取れない？

明治43年(1910年)に東京帝国大学の白鳥教授、京都帝国大学の内藤教授がそれぞれ、邪馬台国の所在地を九州、畿内と唱えて以来100年あまり、魏志倭人伝の記述をめぐる、幾多の論争があった。しかし結論はでない。なぜかという、資料をそのまま素直に読むと、その位置はるか太平洋の沖に行ってしまうのである。(詳細は「魏志倭人伝」参照)

そこで、研究者たちは不弥国以降の方角が「南」となっているのを「東」と読替えて瀬戸内海の航路を進んだとしたり(その多くは畿内説論者)、行程の日数や距離を縮めてみたり、邪馬台国の記述の後にある「水行十日陸行一月」を投馬国からの距離ではなく、帯方郡からの距離(行程)を指すとしたり(九州論者に多い)、「**自郡至女王國萬二千餘里(12,000里)**」という距離だけを採用する(九州論者)、などと解釈した。魏志倭人伝では「里」を用いたり「日数」を用いたりしており、そもそも数字正確性も疑わしく、伝聞や推測も入っている可能性が高い。



魏志倭人伝に記されている行程は下記の通りである。

帯方郡→狗邪韓国 7,000里

→對馬 1,000里

→一大國(壱岐) 1,000里(帯方郡より9,000里)

→末盧国(唐津)1,000里

→伊都国(糸島半島)南東へ陸行 500里(帯方郡より10,500里)

→奴国 東へ陸行100里

→不弥国 東へ陸行100里

→投馬国 南へ水行20日

→邪馬台国 南へ水行10日、陸路1月

総距離(帯方郡→邪馬台国):12,000里

<https://wajinden.com/>

「魏志倭人伝」から邪馬台国は探せない

邪馬台国の所在地については、二大学説として畿内説と九州説があり、加えて、岡山、島根、四国、名古屋、千葉、甲信越、岩手など、邪馬台国の候補地には枚挙に遑がない。

「はじめに」でも触れたが、宮殿跡が見つかった奈良県桜井市の纏向遺跡は畿内説の有力な候補地である。

しかし、これが考古学的に見て、邪馬台国の宮殿跡であると断言できるかどうか。その確証はまったくといっていいほどない。きわめて有力な遺跡ではあるとしても、纏向遺跡全体の五パーセントしか調査されていないとされるため、現時点ではまだ何も断言できない。これが考古学の立場から見た現実である。

もともと「魏志倭人伝」に記された邪馬台国の記述はわずか二千文字足らず。しかもその記述はあまり正確なものではない。

「魏志倭人伝」には魏から邪馬台国に至る里程が記されているのであるが、邪馬台国の所在地の解明をその記述に求めていくと、女王国は九州の陸地を越えてはるか南海に達してしまうという厄介な問題にぶちあたる。

江戸時代から読み継がれてきた連続式の読み方は、「魏志倭人伝」の旅程をそのまま素直に読み下した読み方。一方、東京大学の榎一雄氏が戦後発表された放射式の読み方は、伊都国をセンターとして放射線状に各国と通じるというとらえ方で邪馬台国を九州内に納めた。

大和説の場合は南へ邪馬台国に至る、という記述を東への誤りだとして読み替える。あるいは九州にあった邪馬台国が東遷して大和に来て大和王権をうちたてた、という具合に解釈して所在地を比定しようとする。

しかしまだまだ多くの研究者を説得できるほどの説も遺跡も出てきてはいない。

「邪馬台国をとらえなおす」 大塚初重著 より
(2022年没)

- 邪馬台国論議

- 2010年頃、都内の大学教授が、邪馬台国関連の出版書籍を調査した結果、5万冊を超えていた。
 - 魏志倭人伝の旅程と邪馬台国比定地までの旅程が一致しないため、多岐に渡る邪馬台国論が出現した。
 - 邪馬台国の比定地に関しては、北九州説/近畿説など様々な説が有り、天孫族との関係についても、年代と地域を超えた様々な説が出されている。各々の著作には、人生のある時期を掛けて、生涯で培った能力を全て投入したと思えるものが多く存在する。
 - 魏志倭人伝の旅程と比定された邪馬台国の所在地が問題なく一致するものは、存在しなかった。
- 邪馬台国を論議することの意義は失われている。
- 唯一の解決策は、魏志倭人伝の旅程を、明瞭に解明すること。
 - 原点に戻り、「旅程の解明」が重要なポイントとなる。
 - 旅程は何に基づいて、記述されたのか。
 - 魏の2使節団の訪問記録
 - 2使節団の訪問目的/規模/主要交通機関
 - 方角の基準、里程-距離の基準、距離と日程

1. 「魏志倭人伝の旅程」の正確な解釈。
2. 「魏志倭人伝の旅程」に基づき、比定地を選定。
3. 魏志倭人伝の記述と比定地の一致度を確認。

従来の旅程の反省

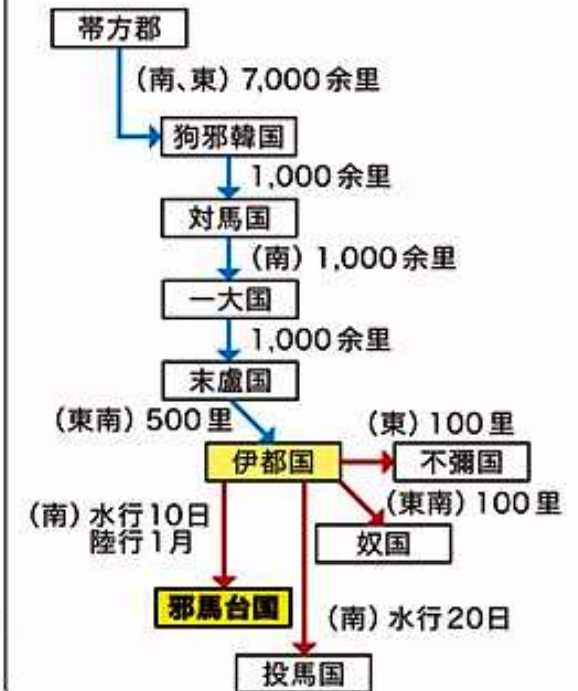
- 倭人伝の記述に沿って朝鮮半島の帯方郡から対馬・壱岐を經由し、唐津付近の末盧国に到着。
- それ以降、旅程を追うことは困難。
 - 旅程を見直し、旅程連続説・放射説などが発生。(下記)
 - 適切に旅程を追うことが困難になる。
- 記述通りの旅程コースが、現実的には、地図上も有り得ない。
 - 全ての旅程探査作業は行きづまった。



◆図表1 連続説



◆図表2 放射説



伊藤雅文氏のブログ
邪馬台国と日本書紀の界限
「魏志倭人伝」行程解釈の「放
射説」を考える より借用

「旅程」の解釈の方法を振り返る

- 従来の旅程・所在地論の問題点
 - 日本人と日本の技術を基に旅程の解明をした。
 - 航海の動力を人力の櫓・オールとした。帆・帆船を除外した。
 - 魏の使節の旅程であることを無視した。
 - 魏の使節の人員規模・交通機関・目的を無視。
 - 距離・位置測定の基準を無視。（含む、短里・長里問題）
 - 旅程の基礎情報(国籍・人数・交通機関・技術/装備)を無視してきた。
 - 旅程自体を正しく理解しないまま、旅程の解明作業を続けた。
 - 放射説・連続説など不可解な解釈
 - 江戸時代の学者のルートを踏襲
- 基礎情報である三国志・魏志・魏志倭人伝
 - 記載した人も、読者も、共に中国人を前提にしている。
 - 魏志倭人伝は、外国の歴史書であることを忘れてはならない。
- 歴史史料を読む時に、歴史研究の基礎である「史料批判」を忘れてはならない。
歴史研究の正攻法！
 - 歴史学の基礎は、史料の収集・読解・分析(史料批判)。
 - 史料を正確に読み取るだけでなく、事実かどうかを疑い、踏み込んで検証する批判的視点が重要です。
 - 旅程も史料批判の対象。→ これがポイントです。

- 魏志倭人伝は、
 - 陳寿が記述した三国志の中の魏書に含まれ、第30巻烏丸鮮卑東夷伝中の倭人条のこと。
 - 史料成立
 - 魏が邪馬台国訪問使節を出した時期は、240年～250年(推定)
 - 著者の陳寿は、生年:西暦233年 没年:297年
 - 著者は、三国の蜀に生まれ、蜀と西晋に仕えた官僚
 - ✓ 同時代の歴史を記載したもので、評価は高い。
 - 倭人伝の内容は、以下の原資料によると推定される。
 - 240年に現地を訪問した魏の使者、梯儁の報告書（卑弥呼に面談）
 - 248年に現地を訪問した魏の使者、張政の報告書
 - 魏の公文書/歴史書
 - ✓ 倭人伝は、現地訪問記録と公文書を基本とした史料で信頼性の評価は高い。
- 梯儁・張政の報告書
 - 初回の現地訪問者である梯儁一行は、倭国・倭人について調査・報告の使命があったと考えられ、その報告書が、倭人伝のベースと推定される。
 - 張政の訪問目的は、軍事支援で、軍事作戦の実行。
 - 梯儁報告書は、張政に確認され、張政報告書には、修正・追加情報が記載されたものと推定する。
- 魏志倭人伝の文書全体を、梯儁報告書/張政報告書等のどの文書が根拠となったのか、解析作業を行う。
次頁に魏志倭人伝全文(紹興本)を原資料別に、色分けして示す。
 - 青色は梯儁の報告書 • 緑色は裴松之の注 • 黒色は魏の外交文書/公文書/歴史書
 - 茶色は張政の報告書 • 赤色は、陳寿が追記した文章

魏志倭人傳 全文(紹興本) 倭人在帶方東南

大海之中依山島爲國邑舊百餘國漢時有朝見者今使譯所通三十國從郡至倭循海岸水行歷韓國乍南至對馬國其大官曰卑狗副曰卑奴母離所居絕島方可四百餘里土地山險多深林道路如禽鹿徑有千餘戶無良田食海物自活乘船南北市糴又南渡一海千餘里名曰瀚海至一大國官亦曰卑狗副曰卑奴母離方可三百里多竹木叢林有三千許家差有田地耕田猶不足食亦南北市糴又渡一海千餘里至末盧國有四千餘戶濱山海居草木茂盛行不見前人好捕魚腹水無深淺皆沈沒取之東南陸行五百里到伊都國官曰爾支副曰泄謨爾支渠有千餘戶世有王皆統屬女王國郡使往來常所駐東南至奴國百里官曰兒馬副曰卑奴母離有二萬餘戶東行至不彌國百里官曰多模副曰卑奴母離有千餘家南至投馬國水行二十日官曰彌彌副曰彌彌那利可五萬餘戶南至邪馬壹國女王之所都水行十日陸行一月官有伊支馬次曰彌馬升次曰彌馬獲支次曰奴佳鞮可七萬餘戶自女王國以北其戶數道里可得略載其餘旁國遠絕不可得詳次有斯馬國次有已百支國次有伊邪國次有都支國次有彌奴國次有好古都國次有不呼國次有姐奴國次有對蘇國次有蘇奴國次有呼邑國次有華奴奴國次有鬼國次有爲吾國次有鬼奴國次有邪馬國次有躬臣國次有巴利國次有支惟國次有鳥奴國次有奴國此女王境界所盡其南有狗奴國男子爲王其官有狗古智卑狗不屬女王自郡至女王國萬二千餘里男子無大小皆黥面文身自古以來其使詣中國皆自稱大夫夏后少康之子封於會稽斷髮文身以避蛟龍之害今倭水人好沈沒捕魚蛤文身亦以厭大魚水禽後稍以爲飾諸國文身各異或左或右或大或小尊卑有差計其道里當在會稽東治之東其風俗不淫男子皆露紒以木縣招頭其衣橫幅但結束相連略無縫婦人被髮屈紒作衣如單被穿其中中央貫頭衣之種禾稻紒麻蠶桑績績出細紒縑縑其地無牛馬虎豹羊鵲兵用矛楯木弓木弓短下長上竹箭或鐵鐵或骨鐵所有無與擔耳朱崖同倭地溫暖冬夏食生菜皆徒跣有屋室父母兄弟臥息異處以朱丹塗其身體如中國用粉也食飲用籩豆手食其死有棺無槨封土作冢始死停喪十餘日當時不食肉喪主哭泣他人就歌舞飲酒已葬舉家詣水中澡浴以如練沐其行來渡海詣中國恒使一人不梳頭不去蟻蟲衣服垢污不食肉不近婦人如喪人名之爲持衰若行者吉善共顧其生口財物若有疾病遭暴害便欲殺之謂其持衰不謹出真珠青玉其山有丹其木有杼杼豫樟櫪投檣烏號楓香其竹篠簪桃支有薑橘椒藟荷不知以爲滋味有獼猴黑雉其俗舉事行來有所云爲輒灼骨而卜以占吉凶先告所卜其辭如令龜法視火坵占兆其會同坐起父子男女無別人性嗜酒(魏略曰其俗不知正歲四節

但計春耕秋收爲年紀)見大人所敬但搏手以當跪拜

其人壽考或百年或八九十年其俗國大人皆四五婦下戶或二三婦婦人不淫不妬忌不盜竊少諍訟其犯法輕者沒其妻子重者滅其門戶及宗族尊卑各有差序足相臣服收租賦有邸閣國有市交易有無使大倭監之自女王國以北特置一大率檢察諸國諸國畏憚之常治伊都國於國中有如刺史王遣使詣京都帶方郡諸韓國及郡使倭國皆臨津搜露傳送文書賜遺之物詣女王不得差錯下戶與大人相逢道路逡巡入草傳辭說事或蹲或跪兩手據地爲之恭敬對應聲曰噫比如然諾其國本亦以男子爲王住七八十年倭國亂相攻伐歷年乃共立一女子爲王名曰卑彌呼事鬼道能惑衆年已長大無夫婿有男弟佐治國自爲王以來少有見者以婢千人自侍唯有男子一人給飲食傳辭出入居處宮室樓觀城柵嚴設常有人持兵守衛女王國東渡海千餘里復有國皆倭種又有侏儒國有其南人長三四尺去女王四千餘里又有裸國黑齒國復在其東南船行一年可至參問倭地絕在海中洲島之上或絕或連周旋可五千餘里景初二年六月倭女王遣大夫難升米等詣郡求詣天子朝獻太守劉夏遣吏將送詣京都其年十二月詔書報倭女王曰制詔親魏倭王卑彌呼帶方太守劉夏遣使送汝大夫難升米次使都市牛利奉汝所獻男牛口四口女牛口六口班布二匹二丈以到汝所在踰遠乃遣使貢獻是汝之忠孝我甚哀汝今以汝爲親魏倭王假金印紫綬裝封付帶方太守假授汝其綬撫種人勉爲孝順汝來使難升米牛利涉遠道路勤勞今以難升米爲率善中郎將牛利爲率善校尉假銀印青綬引見勞賜遣還今以絳地交龍錦五匹(臣松之以爲地應爲絳漢文帝著卓衣謂之弋絳是也此字不體非魏朝之失則傳寫者誤也)絳地縹栗屬十張綺絳五十匹紺青五十匹蒼汝所獻貢直又特賜汝紺地句文錦三匹細班華屬五張白絹五十匹金八兩五尺刀二口銅鏡百枚真珠鈿丹各五十斤皆裝封付難升米牛利還到錄受悉可以示汝國中人使知國家哀汝故鄭重賜汝好物也正始元年太守弓遵遣建中校尉梯儁等奉詔書印綬詣倭國拜假倭王并齎詔賜金帛錦屬刀鏡采物倭王因使上表荅謝詔恩其四年倭王復遣使大夫伊聲耆掖邪狗等八人上獻生口倭錦絳青縑縑衣帛布丹木短弓矢掖邪狗等壹拜率善中郎將印綬其六年詔賜倭難升米黃幢付郡假授其八年太守王頌到官倭女王卑彌呼與狗奴國男王卑彌弓呼素不和遣倭載斯烏越等詣郡說相攻擊狀遣塞曹掾史張政等因齎詔書黃幢拜假難升米爲檄告諭之卑彌呼以死大作家徑百餘步徇葬者奴婢百餘人更立男王國中不服更相誅殺當時殺千餘人復立卑彌呼宗女壹與年十三爲王國中遂定政等以檄告諭壹與壹與遣倭大夫率善中郎將掖邪狗等二十人送政等還因詣臺獻上男女生口三十人貢白珠五千孔青大句珠二枚異文親錦二十四匹

旅程部分について、陳寿追記を検討する

倭人在帶方東南大海之中依山島爲國邑舊百餘國
漢時有朝見者今使譯所通三十國 從郡至倭循海
岸水行歷韓國乍南乍東到其北岸狗邪韓國七千餘
里始度 一海千餘里至對馬國其大官曰卑狗副曰卑
奴母離所居絕島方可四百餘里土地山險多深林道
路如禽鹿徑有千餘戸無良田食海物自活乘船南北
市糴又南渡 一海千餘里名曰瀚海至 一大國官亦曰
卑狗副曰卑奴母離方可三百里多竹木叢林有三千
許家差有田地耕田猶不足食亦南北市糴又渡 一海
千餘里至末盧國有四千餘戸濱山海居草木茂盛行
不見前人好捕魚鰻水無深淺皆沈沒取之東南陸行
五百里到伊都國官卑曰爾支副曰泄謨觚柄渠觚有
千餘戸世有王皆統屬女王國郡使往來常所駐東南
至奴國百里官曰兕馬觚副曰奴母離有一萬餘戸東
行至不彌國百里官曰多模副曰卑奴母離有千餘家
南至投馬國水行二十日官曰彌彌副曰彌彌那利可
五萬餘戸南至邪馬壹國女王之所都水行十日陸行
一月官有伊支馬次曰彌馬升次曰彌馬獲支次曰奴
佳鞮可七萬餘戸 自女王國以北其戸數道里可得
略載其餘旁國遠絕不可得詳次有斯馬國次有巴百
支國次有伊邪國次有都支國次有彌奴國次有好古
都國次有不呼國次有姐奴國次有對蘇國次有蘇奴
國次有呼邑國次有華奴蘇奴國次有鬼國次有爲吾
國次有鬼奴國次有邪馬國次有躬臣國次有巴利國
次有支惟國次有鳥奴國次有奴國此女王境界所盡
其南有狗奴國男子爲王其官有狗古智卑狗不屬女王
王自郡至女王國萬二千餘里

- ・「郡使往來常所駐」は、2回目の張政訪問時以降に判ることで、1回目梯儁の報告書には有り得ず、陳寿の追記。
- ・「南至投馬國水行二十日官曰彌彌副曰彌彌那利可五萬餘戸」は、里数の記述が無く、「自女王國以北其戸數道里可得略載」の記述に矛盾するため、陳寿が追記したものと推測。
- ・「其南有狗奴國男子爲王其官有狗古智卑狗不屬女王」は、内容は、2回目の張政訪問時に判明したことで、陳寿の追記。「此女王境界所盡」と「自郡至女王國萬二千餘里」が本来は連なる順であるはず。

陳寿追記を削除した旅程と日本語訳

倭人在帶方東南大海之中
依山島爲國邑舊百餘國漢
時有朝見者今使譯所通三
十國

從郡至倭循海岸水行歷韓
國卽南乍東到其北岸狗邪
韓國七千餘里始度一海千
餘里至對馬國其大官曰卑
狗副曰卑奴母離所居絕島
方可四百餘里土地山險多
深林道路如禽鹿徑有千餘
戸無良田食海物自活乘船
南北市糴又南渡一海千餘
里名曰瀚海至一大國官亦
曰卑狗副曰卑奴母離方可
三百里多竹木叢林有三千
許家差有田地耕田猶不足
食亦南北市糴又渡一海千
餘里至末盧國有四千餘戸
濱山海居草木茂盛行不見
前人好捕魚鰻水無深淺皆
沈沒取之東南陸行五百里
到伊都國官曰爾支副曰泄
謨舩柄渠舩有千餘戸世有
王皆統屬女王國東南至奴
國百里官曰兕馬舩副曰卑
奴母離有一萬餘戸東行至
不彌國百里官曰多模副曰
卑奴母離有千餘家南至邪
馬壹國女王之所都水行十
日陸行一月官有伊支馬次
曰彌馬升次曰彌馬獲支次
曰奴佳鞮可七萬餘戸自女
王國以北其戸數道里可得
略載其餘旁國遠絶不可得
詳次有斯馬國次有已百支
國次有伊邪國次有都支國
次有彌奴國次有好古都國
次有不呼國次有姐奴國次
有對蘇國次有蘇奴國次有
呼邑國次有華奴蘇奴國次
有鬼國次有爲吾國次有鬼
奴國次有邪馬國次有躬臣
國次有巴利國次有支惟國
次有烏奴國次有奴國此女
王境界所盡自郡至女王國
萬一千餘里

倭人は帶方の東南大海の中に在り、山島に依りて国
邑を爲す。旧百余国。漢の時朝見する者有り。今、使
訳通ずる所二十国。

郡より倭に至るには、海岸に循つて水行し、**韓国**を
へて、あるいは南しあるいは東し、其の北岸**狗邪韓国**
に到る七千余里。

始めて一海を渡る千余里、**對馬国**に至る。其の大官
を卑狗と曰ひ、副を卑奴母離と曰ふ。居る所絶島、方
四百余里可り。土地は山険しく、深林多く、道路は禽
鹿の径の如し。千余戸有り。良田無く、海物を食して
自活し、船に乗りて南北に市糴す。

又南一海を渡る千余里、名づけて瀚海と曰ふ。**天**
国に至る。官を亦卑狗と曰ひ、副を卑奴母離と曰ふ。
方三百里可り。竹木・叢林多く、三千許りの家有り。
差々田地有り、田を耕せども猶食するに足らず、亦
南北に市糴す。

又一海を渡る千余里、**末盧国**に至る。四千余戸有り。
山海に浜(そ)ひて居る。草木茂盛し、行くに前人を
見ず。好んで魚鰻を捕へ、水深浅と無く、皆沈没して
之を取る。

東南陸行五百里にして、**伊都国**に到る。官を爾支(に
き)と曰ひ、副を泄謨舩・柄渠舩と曰ふ。千余戸有り。
世々王有るも、皆女王国に統属す。

東南**奴国**に至る百里。官を兕馬舩と曰ひ、副を卑奴
母離と曰ふ。一万余戸有り。

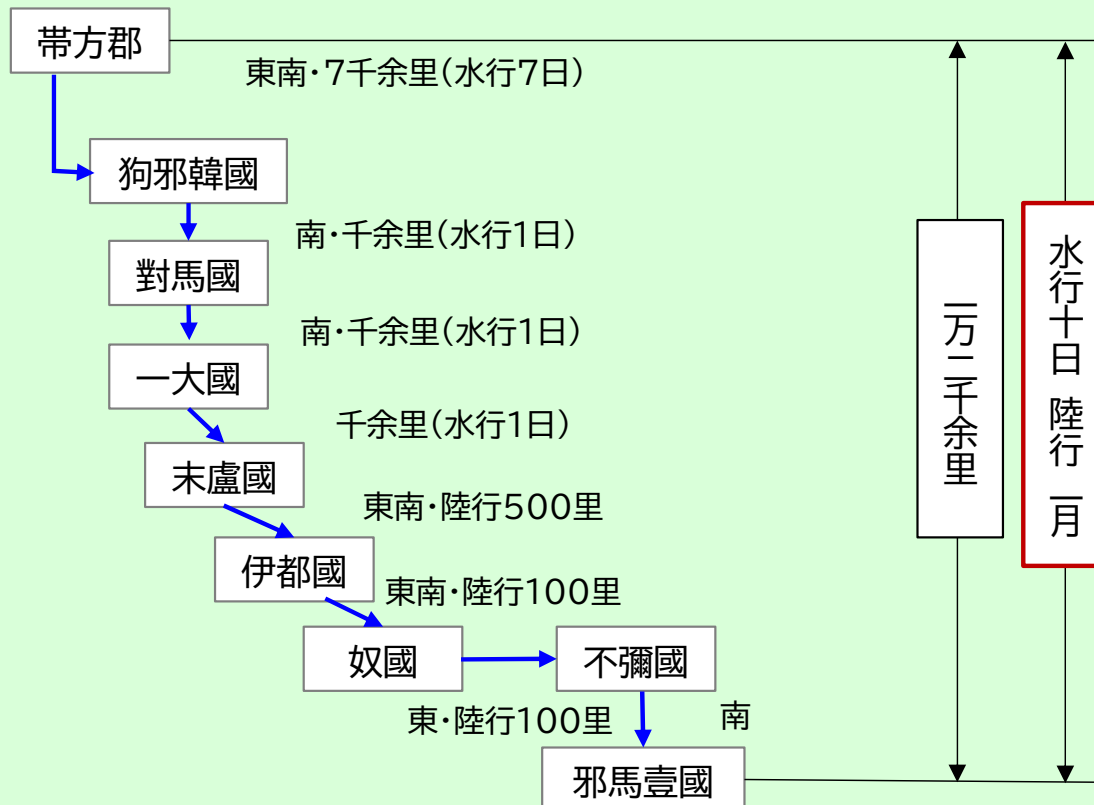
東行**不弥国**に至る百里。官を多模と曰ひ、副を卑奴
母離と曰ふ。千余家有り。

南、**邪馬台国**に至る、女王の都する所、**水行十日陸**
行一月。官に伊支馬有り、次を弥馬升と曰ひ、次を弥
馬獲支と曰ひ、次を奴佳鞮と曰ふ。七万余戸可り。

女王国より以北、其の戸数道里は略載す可きも、其
の余の旁国は遠絶にして得て詳かにす可からず。次
に斯馬国有り、次に已百支国有り、次に伊邪国有り、
次に都支国有り、次に弥奴国有り、次に好古都国有
り、次に不呼国有り、次に姐奴国有り、次に對蘇国有
り、次に蘇奴国有り、次に呼邑国有り、次に華奴蘇奴
国有り、次に鬼国有り、次に為吾国有り、次に鬼奴国
有り、次に邪馬国有り、次に躬臣国有り、次に巴利国
有り、次に支惟国有り、次に烏奴国有り、次に奴国有
り。**此れ女王の境界の尽くる所なり。郡より女王国**
に至る萬一千余里。

日本大百科全書(ニッポニカ)「魏志倭人伝(読み下し)」の解説
を借用し、陳寿追記部分を削除した。

旅程の正確な解釈

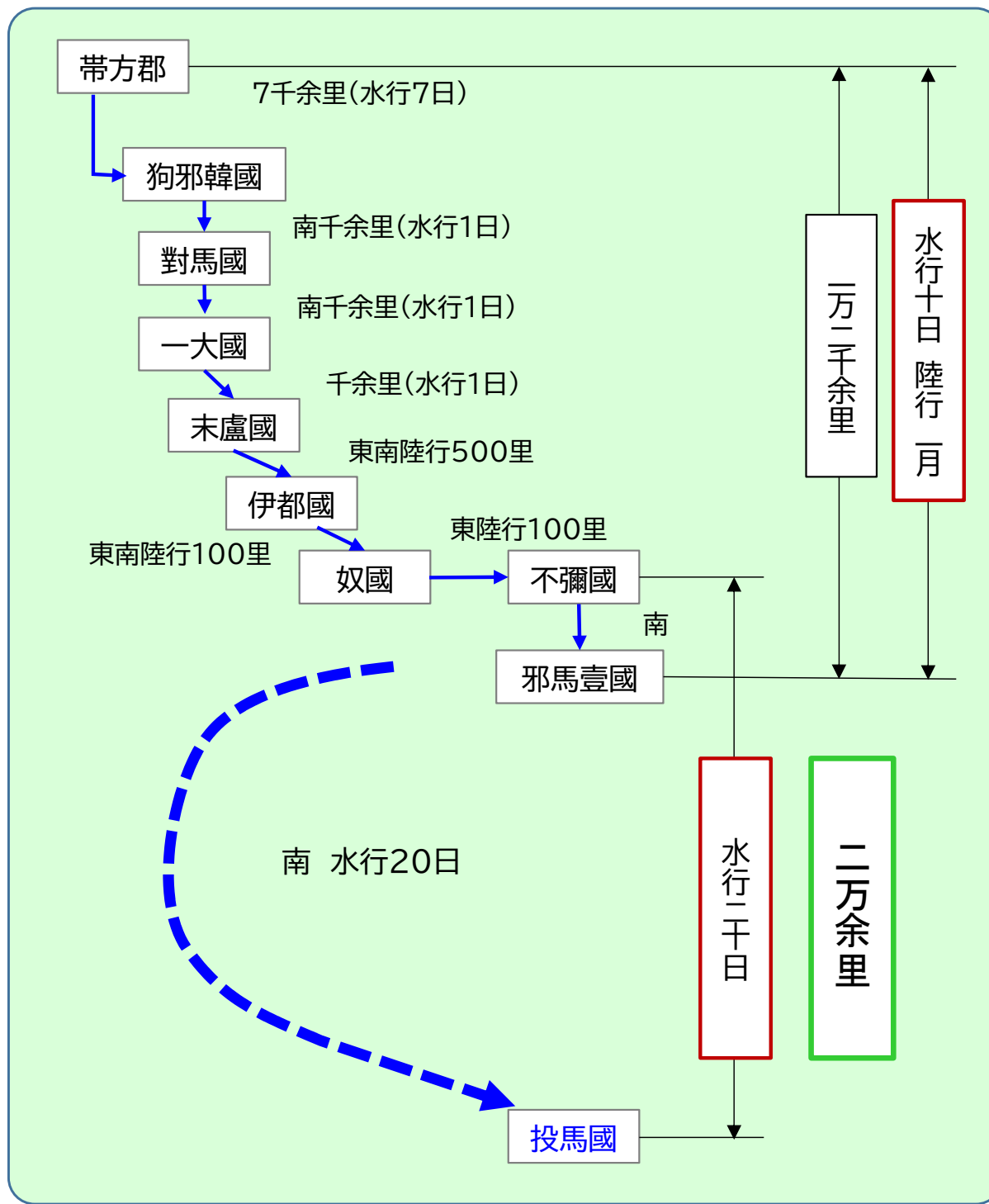


- 旅程の記し方は、7千里→千里→500里→100里→記載なし(100里以下)と目的地に近づくほど精密に記載。
- 一大國→末盧国のみ方角無し、外は全て方角の記載有り。
- 距離を合計すると1万7百里。但し、水行に余里の記載があり、7千里/千里に付けられた余里を数百里を10ヶ所分加算することになる。従って全体としては、1万2千里とする合計に合致する。
- 水行千里を1日と推定すると水行合計は10日で「水行10日陸行1月」に合致
- 経由地に全て名称が記載がある。
- 開始地から経由地を含め目的地まで、
 - 地名・方位・距離の明細を記載
 - 合計距離数
 - 所用日数
 が明快に記載され、ほぼ完ぺきな旅程記述と云える。

旅程の正確な解釈： 『陳寿追記を削除した旅程』の評価

- 『陳寿追記を削除した旅程』が、**梯僞の報告文であった。**
- 問題のあった部分
 - 「自女王國以北其戸數道里可得略載」の記述にも矛盾が無い。
 - 次有奴國此女王境界所盡 自郡至女王國萬二千餘里 と文章の順序はきれいにまとまっている。
 - 最後の奴国が女王国の境界の尽きる処で、帯方郡から女王国に至る里数の合計は万二千里、と明快な論旨となっている。
- **旅程報告書としてみると、全体として矛盾なく、論旨明快な記述をしている。**
 - 個々の区間の距離・方向を明示。
 - 合計の所要日数を明示。
 - 合計の距離を明示。
 - 旅程記述の手本となる書き方。
 - 長い旅程を報告する場合は、開始地点に近い処は長距離の単位で、目的地に近いほど緻密に短い単位で距離を記載することが望まれる。
 - この通り、1000里単位から500里、100里単位で目的地到着。
- **梯僞の報告文が、帯方郡から邪馬台国への旅程である。**
- 「**南至投馬國水行二十日官曰彌彌副曰彌彌那利可五萬餘戸**」は、
 - 別の主旨で挿入された文章で、邪馬台国への旅程に、組み込まれるべきでは無いと判断する。
 - 別途、報告・説明が必要な地域・国で、邪馬台国への旅程の2倍近い遠方に有ることを示す。
 - 投馬国については、別途、検討し記す。

追記部分(投馬国)を含む旅程の新しい解釈



- 「郡使往來常所駐」は、2回目の張政訪問時に判明した事実を追記し、情報を追加。旅程としては、特に問題は無い。
- 「其南有狗奴國男子爲王其官有狗古智卑狗不屬女王」は、2回目の張政使節団が把握した事実を記し、情報を追加。挿入個所前後の文章のつながりを断絶し、不適切だが有用な記述。
- 「南至投馬國水行二十日官曰彌彌副曰彌彌那利可五萬餘戸」は、整然とした旅程記述に強引に追加文章。
 - 梯儁一行が現地を踏破したと推測される経由地は、里程が記載されてきたが、投馬国には距離・里程が無い。
 - 旅程記載の最後の「自女王國以北其戸數道里可得略載」の記述に矛盾する。
 - 水行20日は余りに遠く、不自然。
 - ✓ 以上の理由で途中経由地ではない。
 - 挿入個所から考慮すると、不彌國付近から、大変遠方である水行20日に投馬国は、位置する。
 - 距離感から考えると不彌國からと言うよりも、邪馬台国から大変遠方にある国と云える。
- 投馬国(琉球)を、何故、強引に投入したのか？

魏の外交情勢から考える魏の倭国への対処方法の推察

西暦		魏	呉
230			夷洲・亶洲(倭国)に軍を派遣。
231			
232			3月、遼東に軍を出し、魏に討たれた。 10月、公孫氏に使者を送る。 公孫氏、馬など呉に献上。呉の爵位を受領。
233		魏は公孫氏に圧力。 呉使者の首/公孫淵を大司馬に	再度使者を送るが、公孫氏が呉を裏切る。 呉の使者の一部が高句麗に逃れ、 高句麗が呉に送り届ける。
234		諸葛亮が陣中に死す。	高句麗へ使者送る。 魏の圧力あり失敗。馬80頭を得て帰国。
235			
236			高句麗王の位宮が呉の使者の首を 幽州に届ける、魏志
237	景初元年	毋丘儉、遼東へ進軍 密かに軍船を送り帯方/楽浪占拠 公孫淵が自立して燕王を称する。	
238	景初2年 正月	司馬懿仲達-遼東に向け出陣	公孫氏が支援を求める
	6月	卑弥呼の使者 帯方郡に到着	
	8月	司馬懿仲達、公孫氏を滅亡	
	12月	倭の使者魏王に面会 金印などを受領	
239	景初3年 1月	明帝死去	
	3月	呉は遼東に軍を送り、魏の守将を撃つ	
240	正始元年	魏の使者: 梯儁が邪馬台国訪問	
241	正始2年		
242	正始3年		
243	正始4年	倭王、魏へ使節を送る 正始4年/6年/8年	
244	正始5年	魏は將軍毋丘儉を高句麗に派遣。首都の丸都城陥落、1,000人斬首。後、首都返還	
245	正始6年	毋丘儉、再度高句麗攻撃。高句麗王逃亡。	
246	正始7年	帯方郡/弓遵・楽浪郡/劉 茂は、反乱した韓を滅亡。弓遵戦死。	
247	正始8年	帯方郡王頎、張政を倭国へ派遣	
248	正始9年	卑弥呼死亡	
249	正始10年		

- 呉は、宿敵の魏を倒すために、周辺国へ外交工作を行って来た。
 - その対象国は、公孫氏、高句麗及び倭国(日本)
- 孫権が呉を継承した翌年に、最初に外交工作を行おうとした国は、倭国。
 - 1万の兵と2將軍を出し、到着できず失敗。
 - 次いで、対象とした国は、公孫氏、高句麗。
- 呉と交易を行った倭人(琉球)と日本列島に住む倭人(倭国)との不二つの倭人の国が存在することを、中国側は当初、明確に理解していなかった。
- これを受けて、魏は外交戦略に注力。
 - 公孫氏、高句麗に関しては、逆転に成功。
 - その上で、公孫氏を策をもって、反逆させ、虐殺・撲滅を行った。
 - 正始年間に毋丘儉が高句麗を攻めさせ斬首・捕虜3千人。翌年の再度征伐し、誅殺・降伏8千人。
 - 呉と友好関係を持った国(二股外交国)には、大虐殺を持って対応していた。
- 呉が接触に失敗した倭国が朝貢してきた時、魏はどんなことを考慮し、戦略を練ったのか？
 - 倭国が呉との二股外交を行っていないか、確認が必要であった。
- 倭国と魏の関係を検討する時には、外交戦略を見直しは必須。

投馬国考：魏志倭人伝と後漢書

- 魏志倭人伝：計其道里當在「会稽東冶之東」
 - 使節が訪問し天測し、推定した位置と見る
- 後漢書：其地大較在「会稽東冶之東」
 - 著者范曄が三国志を読み、推定した位置と見る

➤ 三国志・呉志の記述を引用

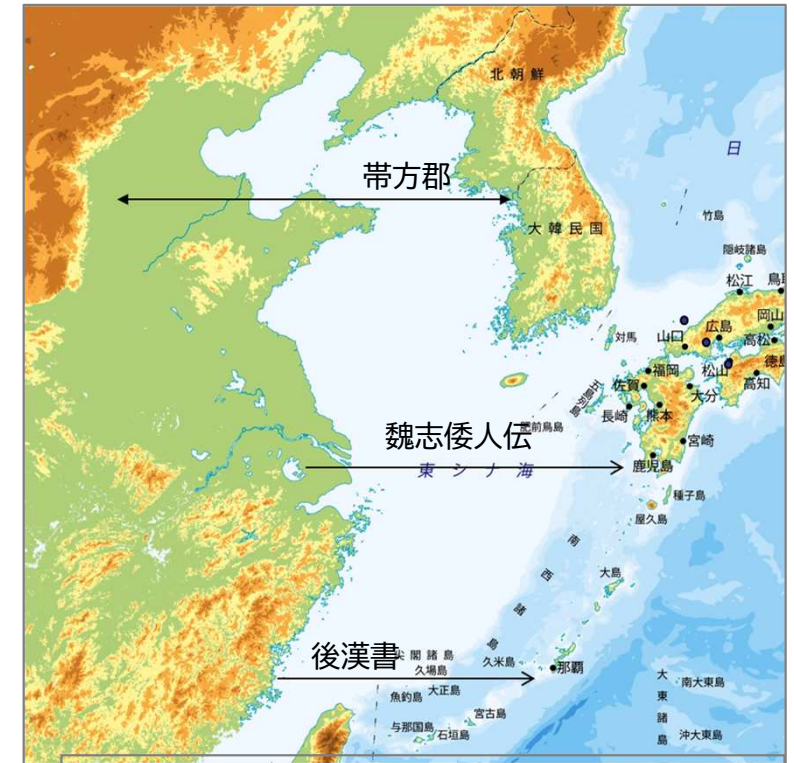
- ✓ 会稽海外有東鯤人(鯤音達奚反)分爲二十餘國又有夷洲及澶洲
傳言秦始皇遣方士徐福將童男女數千人入海求蓬萊神仙
不得徐福畏誅不敢還遂止此洲 世世相承有數萬家
人民時至會稽市會稽東冶
縣人有入海行遭風流移至澶洲者所在絕遠不可往來

◆ 三国志・呉志には「人民時至會稽貨布」とある。

二年春正月、遣將軍衛溫、諸葛直將甲士萬人浮海求夷洲及澶洲。
澶洲在海中、長老傳言秦始皇遣方士徐福將童男童女數千人入海、
求蓬萊神山及仙藥、止此洲不還。
世相承有數萬家、其上人民時至會稽貨布、會稽東縣人海行、
亦有遭風流移至澶洲者。所在絕遠、卒不可得至、但得夷洲數千人還。
三年春二月、衛溫、諸葛直皆以違詔無功、下獄誅。

• 范曄の理解(推測)

- 范曄は呉志の記述から、会稽に貨布の為に定期的に訪れる人民を、邪馬台国の倭人と推定。
- 訪れる人民の居ると記された場所を考慮し「会稽東冶之東」と記したと推定する。
 - 范曄の推定とは、残念ながら異なり、貨布の為に訪れた人々と邪馬台国の倭人は違っている。
 - 呉の会稽に訪れた人々は琉球人で、邪馬台国の倭人は九州人。



伊藤雅文氏のブログ「邪馬台国と日本書紀の界限」を参考にして。国土地理院地図を使い作成

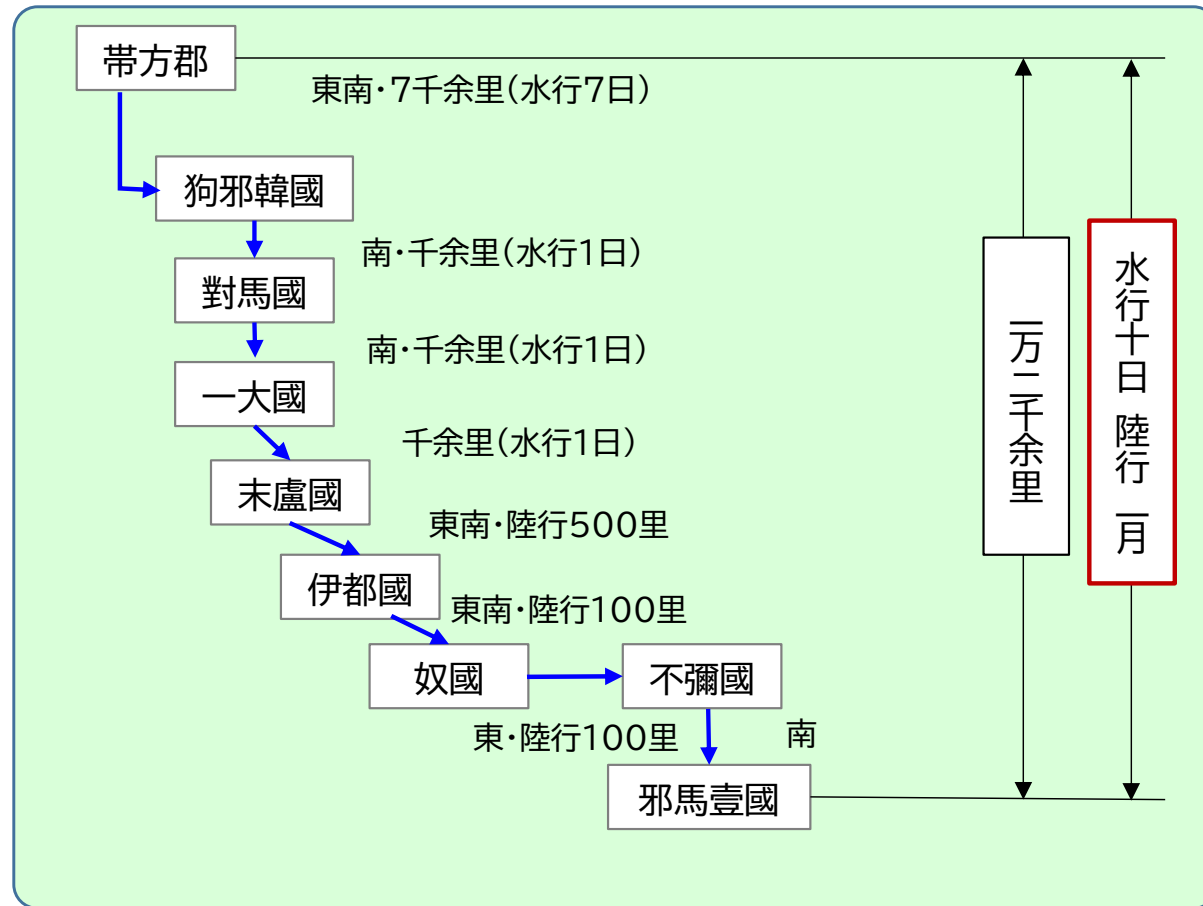
陳寿が、旅程中に投馬国を強引に挿入した理由

- 整然とした報告書の中に強引に投馬国への旅程を投入した理由は、何か？
 - 投馬国(琉球)を挿入記載する程の重大な理由が陳寿に有ったものと推察する。
 - 重大な理由とは何か？ これは、梯儁の使節の訪問目的に関わるものと見る。
 - 一般的な解説書では、梯儁の使節が邪馬台国を訪れた目的は、親善・友好と書かれている。
 - 親善・友好とは別な重要な目的が有ったのだろうか。 有ったから、投馬国の追記を行ったと見る。
- 2022年4月16日の第16回の会合で「卑弥呼の使者を迎えた中国・魏の外交情勢」の基本レポートの中に、梯儁使節の訪問の目的を詳細に検討し、記している。
 - 景初2年(238年)卑弥呼の使者が魏に朝見した時期の背景は
 - 蜀の諸葛孔明が戦場で病死し、蜀が滅亡寸前と判断され、三国最終段階の魏と呉の一騎打ちの状況に入った。
 - 魏と呉は決戦を前に外交戦略・戦争を激しく行った。
 - 魏の周辺国の公孫氏/高句麗へ数千から1万人の大使節団が送り込み、魏との友好関係を割き、呉との友好確立を図った。
 - 呉の戦略が功を奏する時期もあったが、魏が呉の戦略を打ち砕いた。
 - この外交戦略を指揮してきた魏の明帝と司馬懿は、敵対する呉の味方になりかねない公孫氏の殲滅を計り、238年年初より、司馬懿が直接出陣し、遼東の公孫氏撲滅を行った。
 - 公孫氏を大量虐殺し、撲滅する直前の6月に卑弥呼の使者が帯方郡に到着し、魏を訪問した。
 - 12月明帝が卑弥呼の使者に面談し、歓待。魏の使節の邪馬台国訪問を宣言した。
 - (この直後に明帝は病で倒れ、次の正月に死亡。)
 - **明帝が、相手国へ直接使者を送り込んだ理由は、単なる友好ではなく、呉との外交関係が無いことの確認と、外交関係を持たせないことが目的であったと理解する。**
 - 三国志の呉志では、陳寿は、呉が東方の倭人と外交関係があったことを記している。
 - 更に、別に、呉が2万人の大使節団を派遣していたことを記している。
 - 呉との友好関係の疑いを持つ魏側にとっては、邪馬台国に呉と外交関係を持たせないことは、極めて重要なこと。
 - **呉と外交関係を持っていた琉球(投馬国)は**、邪馬台国から遠くはなれた別国であると、梯儁の使節団が判断した。
 - 倭人の国が、別々の離れた場所に存在したことは、当然報告すべき重大ニュースとして報告されていたと推測。陳寿は、この報告の投馬国を旅程中に、強引に追記したものと判断する。
 - 呉と外交関係を持つ投馬国が、邪馬台国とは別の国で、水行20日の遙か遠方にあるあること、そして、邪馬台国は、二股外交を行っていないことは、陳寿にとって、魏志倭人伝に記すべき価値があったと推測する。これが、陳寿の強引に挿入した理由と考える。

「魏志倭人伝の旅程」に基づき、適合する比定地を求める。

- 旅程をたどり、対馬国/壱岐国は、地形から判断して正しいと判断。
- 大多数の邪馬台国論者が「末盧国」を唐津・唐津付近と想定しているが、誤りと判断。
 - 理由1)旅程の記載とは違う。水行千里の距離に無い。
 - 理由2)唐津付近から、旅程にある「東南500里の伊都国」が地形上存在しない。
 - 理由3)江戸時代以来、「松浦県」を「末盧国」と判断した根拠となった古事記・日本書紀の神功皇后の記述には、不正確な読み方・誤った理解があった。
 - 2021年9月25日 第10回邪馬台国論(唐津上陸説に根拠はあるか?)で詳細記述。
 - 日本書紀の神功皇后が鮎を釣って士気を鼓舞した場所は、唐津近くの松浦県で正しい。
 - 古事記の神功皇后が産後の肥立ちが良く、外出し、鮎を釣った場所は、松浦県ではない。
- 九州上陸地点を唐津以外に求める。
 - 旅程の当事者は、魏の使節団 (第10回邪馬台国論(唐津上陸説に根拠はあるか?)で詳細記述。)
 - 魏国の公式使節、卑弥呼に面会し、詔書・金印を渡す目的、難升米了承。
 - 魏の公式使節団の構成は、数千から1万人程。(過去の呉の公式使節団の構成を参考に判断)
 - 使用船舶は、大型帆船。(公孫氏討伐時に楽浪・帯方郡を襲撃した時に大型帆船使用)
 - 邪馬台国訪問に最も適切な経路となる大型の港湾のある場所が候補地となる。
 - 旅程の記述に準拠
 - 壱岐の島より水行千里。方向記述無し。
 - 次の旅程:「東南500里の伊都国」が可能なこと。伊都国では交易の管理が可能なこと。
- 以上の条件とその当時の地理条件(古地図を参照)に合わせて検討する。
 - 博多が唯一の候補地となる。(外の港湾は条件に合わない。)

「魏志倭人伝の旅程」



比定地の適合：何処へ上陸？



- 唐津上陸の理由が無いならば、何処へ上陸したら、良いのか？
- 追加条件: 東南500里陸行が可能な場所・港湾管理が可能な場所
- 博多湾が最も有力な候補となる。

魏・梯僞使節の規模・船舶・航海技術

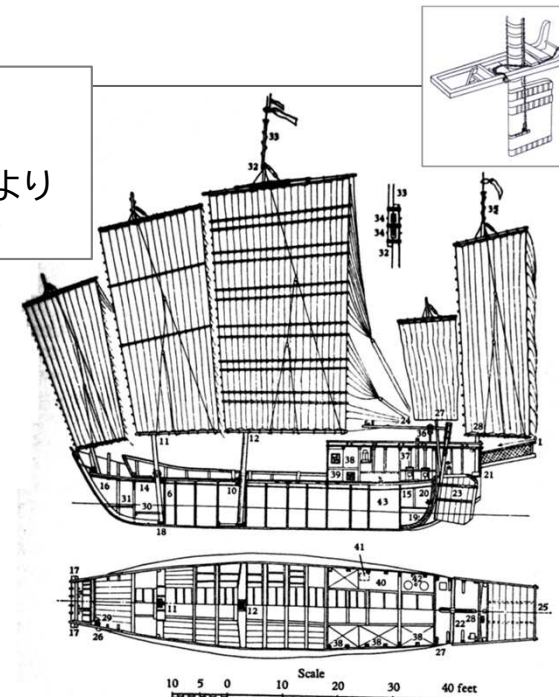
- 魏の正始元年の使節：魏・梯僞使節
 - 使節の人員・規模：大型帆船30隻以上 人員は、最低でも2～3千人
 - 呉が妨害することを想定すると、2～3千人は少人数であったかも知れない。
 - 対抗した呉の使節が1万人を超える規模であった。{対公孫氏・対夷洲/亶州(倭国)}
 - 魏は、景初年間に、帯方郡・楽浪郡を占領するために海船で軍を送っている。→
 - 帯方郡占領に使った船舶・海洋技術を、倭国訪問使節団は使用した。
 - **B.C.109年、漢の武帝は、朝鮮討伐の為、**
 - **楼船(ろうせん)将軍・楊僕(ようぼく)に5万の兵を与え、山東半島から海路、朝鮮へ侵攻させた。**
 - **中国は、紀元前から大型帆船建造技術を持ち、数万の兵員を海上輸送する船舶と技術を持っていた。**
 - 使節団の中核は軍隊組織。
 - 帯方郡自体は、軍隊組織で、外地を占領し支配している部隊であった。
 - 帯方郡から邪馬台国までの旅程・航路に関する情報は、入手済で、倭人の協力を受けた筈。
 - 難升米一行は、魏の使節団を受け入れる役割を担っていた筈で、旅程・航路の情報は提供され、航路案内に、水先案内人に該当する人員・船舶を帯同させたと推定される

沙船は殷商時代にその原形が現れ、後世の絶えざる進歩を通じて宋の時に普遍的になり、制作技術が定型化した。



中国古代的戦艦
2016-12-08
由 煮酒君談史 發表于歴史
<https://kknews.cc/history/jvejr66.html>

ジョセフ・ニーダム著
中国の科学と文明
第11巻 航海技術 より
第935図 沙船



舵は
昇降が
可能

魏の使者の博多港上陸の障害

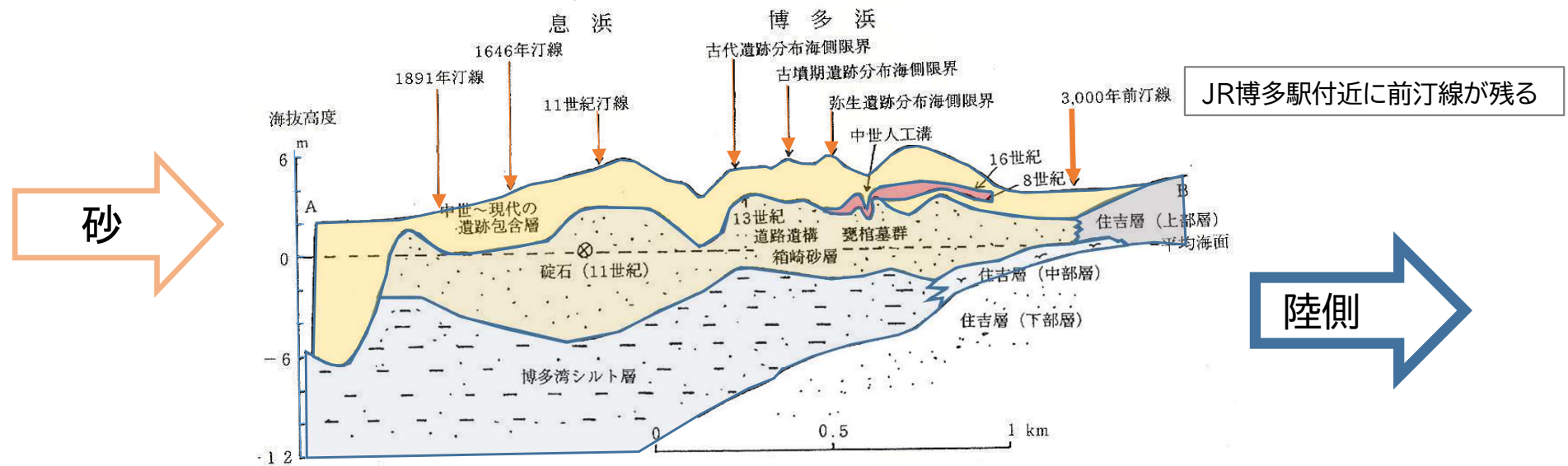
- 現状の博多港や博多湾を知る人は、博多の地形が、海岸線の砂浜は足がズブズブ入る「ハガタ」で、上陸が難しいとして、使節の博多上陸を認めない。
- 古代の地形を地質学者が調べた結果を確認すると、博多付近は、3～4千年前の警固地震などにより地盤が上下運動を起こして、海面と陸の上下位置関係が変化しているが、古代から良港として使われていたことが判明した。

(第10回 2021/9/25 「邪馬台国論」-「唐津上陸説に根拠はあるか？」17～28頁に地質学から紹介)

- 考古学・歴史記録上も古くから良港として使われていたことが残る。
 - 古墳時代後期(6～7世紀)に那津官家(なつのみやけ):非常時用に食料を保管した)が作られ、港としての機能。

◆ 以下、貝原益軒の筑紫国続風土記 卷之四 より

- 弘仁5年(814年)新羅の人が筑紫国博多津に漂着との記事が、日本後紀にあり。これが「博多」と云う地名の初見。
- 833年～850年 新羅の人が筑前大津に来るとの記述、続日本紀にあり。「大津」も、博多を指す。
- 貞観11年(869年)新羅の海賊2艘が博多到来、
- 江戸時代中期以降は、砂の堆積で水深が浅くなり、大型の千石舟の入港が不可になった。
- 現在は、水路等を浚渫工事して、大型船舶の入港が可能。



2016/3/18

図 4-15 大博通り付近の地形・地質・遺構等の模式断面図

九州上陸地点は博多湾

住吉神社

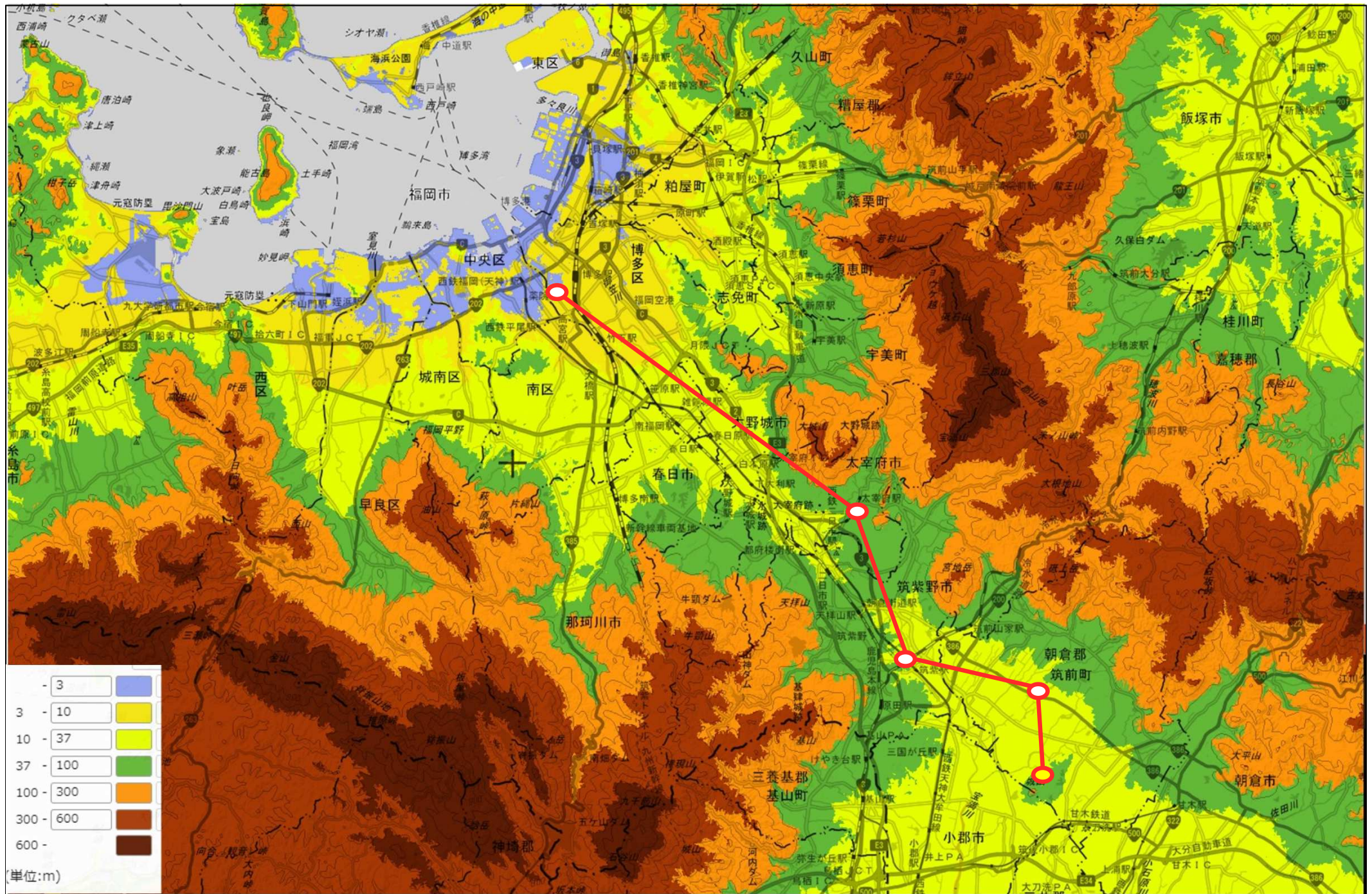
博多古図:住吉神社絵馬の
写しより

鎌倉時代の博多港の古図
北を上に変角を変更

下山正一(九州大学)の資料より
博多港付近の高低差を示した地図

魏の使節の帆船は、冷泉津に到来し、住吉神社
付近に上陸し、御笠川に沿って伊都国へ陸行し
たものと推定する。
その他の船群は、草香江津の方にも停泊できた。
周囲は、末盧国の海人が魚貝を取る様子が見ら
れたものと推定する。

鎌倉時代には、三笠川は、
住吉神社の北側に河口が来ていた。
流れが現在と違う



- 古代の地点や道筋を概略算出してみたのが下記のもの。正確ではないが、おおよそ合致する。

1. 末盧国：上陸地点を博多：住吉神社付近(標高3m)とする。次の目的地までの方向は、**東南**

- ・ 大宰府付近までの**直線距離**は、**13km**
- ・ 博多古図を見ると、三笠川の河口は住吉神社付近(現在と違う地形)
- ・ 旧三笠川の流れに沿って、道が作られ、曲がりくねっていたものと想像。
 - ・ 道の長さは、直線距離の2倍と見る：26km
 - ・ 1里75mと換算し、26kmは**約350里** これを**5百里**と称した。

対馬と韓国の巨済島の間は約75km
 壱岐と対馬の間は73km、
 各々千里としている。
 そこで1里を75mと換算
 この換算は、**短里説と一致する**

2. 伊都国：大宰府市役所(標高37m)から次の地点までの方向は、**東南**

- ・ 筑紫神社付近までの**直線距離**は、**6.5km**
- ・ 地溝地帯で、平坦な道のり 標高52mの所へ
- ・ 道の長さは、直線距離の1.3倍と見る：8km
 - ・ 8kmは**約113里** これを**百里**と称した

3. 奴国：筑紫神社付近(標高52m)から次の地点までの方向は、**東**

- ・ 朝倉市筑前町役場付近までの直線距離は4.7km
- ・ 途中で、宝満川を渡るため迂回する
 - ・ 道の長さは、直線距離の1.3倍と見る：6km
 - ・ 6kmは**約81里** これを**百里**と称した

	直線 距離	係数	道の 長さ	里数	里数 概数	方向
住吉 神社	13	2	26	347	500	東南
太宰府 市役所	6.5	1.3	8	113	100	東南
筑紫 神社	4.7	1.3	6	81	100	東
夜須町 役場	2.5	1.2	3	40	0	南
城山 北側						

4. 不彌國：朝倉市筑前町(旧夜須町)役場付近(標高31m)から、女王国までの方向は、**南**

- ・ 直線距離は、2.5km
- ・ 平坦で障害となるもの無し。
 - ・ 道の長さは、1.2倍と見る：3km
 - ・ 3kmは**約40里**で、**百里とは云えず**、単に方向を記し、**距離は記さない**。

5. 女王国：その南の城山(花立山)の北側付

魏志倭人伝で使われる数字

- 魏志倭人伝中に「自女王國以北其戸數道里可得略載」とあり、戸数と距離・方向は概略の記載が出来たと記している。

- では、どの程度に概略なのか？ これを推理する。
 - 戸数の記述をまとめてみると右の表のようになる。
 - 奴国が2万、その他の国合わせて1万、合わせて3万
 - 極めて切りの良い数字になっている。

	戸数	合計
對海国	1,000	30,000
一大国	3,000	
末盧国	4,000	
伊都国	1,000	
奴国	20,000	
不彌国	1,000	
邪馬台国	70,000	70,000
投馬国		50,000
計	100,000	150,000

- 距離に関して
 - 千、五百、百と云う数字で表されている。
 - 上記同様に、極めて切りの良い数字になっている。

- 方向に関して
 - 南、東、東南、これらのみ。
 - 概略と云える。

- 数字は丸められた極めて単純化された記述方法を使用していることがわかる。上陸後の方位・距離も丸められたものと考え、前頁の計算でも、概略の基準に合致した数字と云える。

余里を $+\alpha$ の表記

出発地		到着地	方位	距離など	
帶方郡	⇒	邪馬台国		12,000里 $+\alpha$	
帶方郡	⇒	邪馬台国		水行10日陸行1月	
帶方郡	⇒	狗邪韓国	東南	7,000里 $+\alpha$	水行
狗邪韓国	⇒	對海国	南	1,000里 $+\alpha$	水行
對海国	⇒	一大国	南	1,000里 $+\alpha$	水行
一大国	⇒	末盧国	-	1,000里 $+\alpha$	水行
末盧国	⇒	伊都国	東南	500里 $+\alpha$	陸行
伊都国	⇒	奴国	東南	100里 $+\alpha$	陸行
奴国	⇒	不彌国	東	100里 $+\alpha$	陸行
不彌国	⇒	邪馬台国	南		
邪馬台国	⇒	投馬国	南	水行20日	水行

◆ 半沢栄一著「邪馬台国の数学と歴史学」に詳しい記載がある。

・ 古代中国の宇宙観「蓋天説」がある。

- ・ 夏至南中時に、2か所で、八尺の測量用の棒を立て、日影長を測り、その差が一寸であれば、2か所間の距離を千里とするとする測量に基づく距離基準があった。
- ・ 都のあった洛陽付近で計測され、千里は約77kmになるという。（従って1里は約77mとなり、これを短里と呼ぶ）
- ・ この観測が『周髀算経』に一寸千里法として記されている。

・ その後宇宙観は新しくなり「渾天説」が広まった。

- ・ 距離基準は、王朝で異なり、1里は415m～541mで約500m、(これを長里と呼ぶ)
- ・ 千里は約500km。

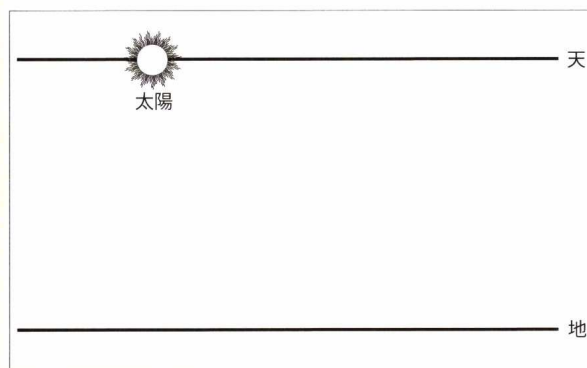


図1 蓋天説

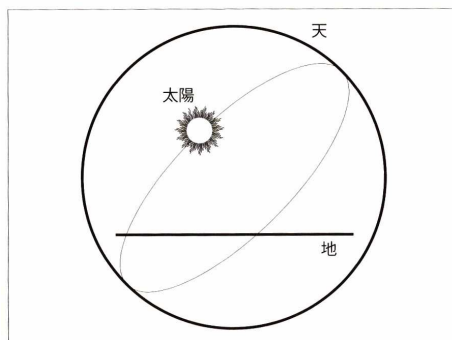


図6 渾天説

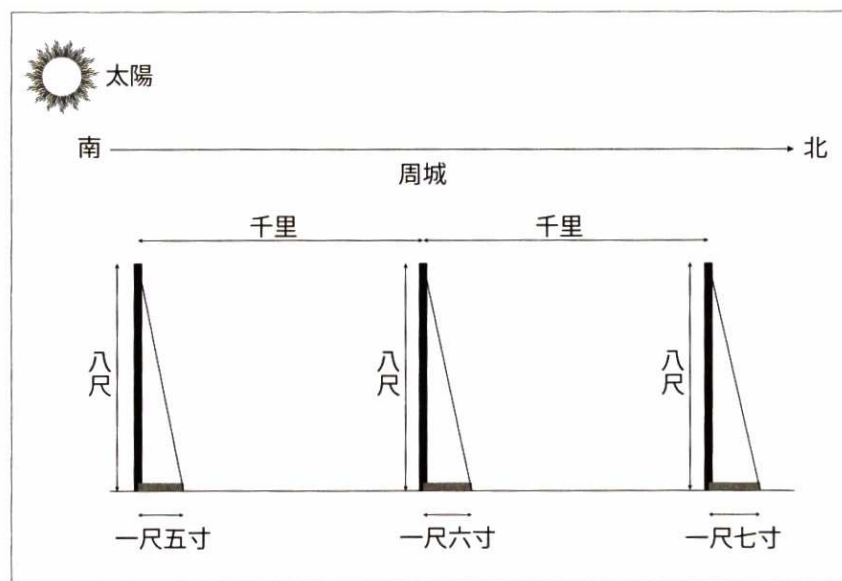
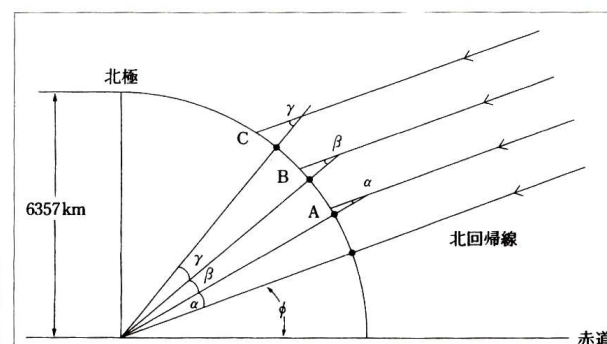


図2 『周髀算経』棒の影の長さの変化



ϕ : 北回帰線の赤道からの角度、約 23.5 度 ~ 24 度
 A : 八尺の棒の影の長さが一尺五寸となる地点
 B : A の北「千里」で棒の影の長さが一尺六寸となる地点
 C : B の北「千里」で棒の影の長さが一尺七寸となる地点
 α 、 β 、 γ : それぞれ A、B、C の北回帰線からの角度

平行線の錯角は等しいから、

$$\tan \alpha = 1.8/8$$

$$\tan \beta = 1.6/8$$

$$\tan \gamma = 1.7/8$$

逆三角関数の計算より

$$\alpha = 0.1853 \text{ ラジアン} = 10.6 \text{ 度}$$

$$\beta = 0.1974 \text{ ラジアン} = 11.3 \text{ 度}$$

$$\gamma = 0.2094 \text{ ラジアン} = 12.0 \text{ 度}$$

したがって

$$AB \text{ の弧長} = 6357 \text{ キロメートル} \times (0.1974 - 0.1853)$$

$$= 76.9 \text{ キロメートル}$$

$$BC \text{ の弧長} = 6357 \text{ キロメートル} \times (0.2094 - 0.1974)$$

$$= 76.3 \text{ キロメートル}$$

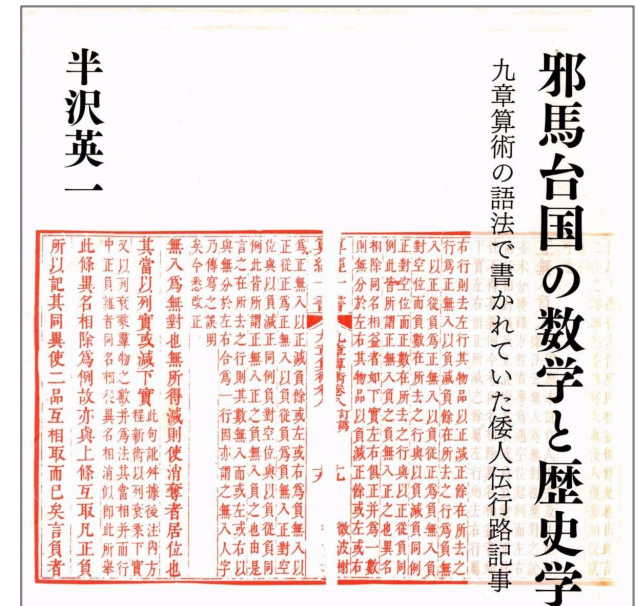
☆だから「一寸千里説」の「一里」=約 76 ~ 77 メートルである。

図4 谷本茂氏による計算（半沢 [93] より転載）

- 漢の時代には、宇宙観は「渾天説」で、長里が使われていた。
- 魏の明帝が年号を景初に改めた時に、復古主義が採用され、暦と度量衡の変更が行われた。
 - 景初歴が採用され、景初元年(287年)から南朝宋の時代(444年)まで使われた。
 - 宇宙観は「蓋天説」が採用された。
 - 度量衡は、短里が採用されたと推定される。
 - 但し、極端な変化は、受け入れられず、長里が使用されたと見られる
 - 遠隔地である楽浪郡/帯方郡では、文書として伝わった短里が採用されたと推定する。
 - その地では、景初及び正始年間の短期間に限り、短里が使用された。

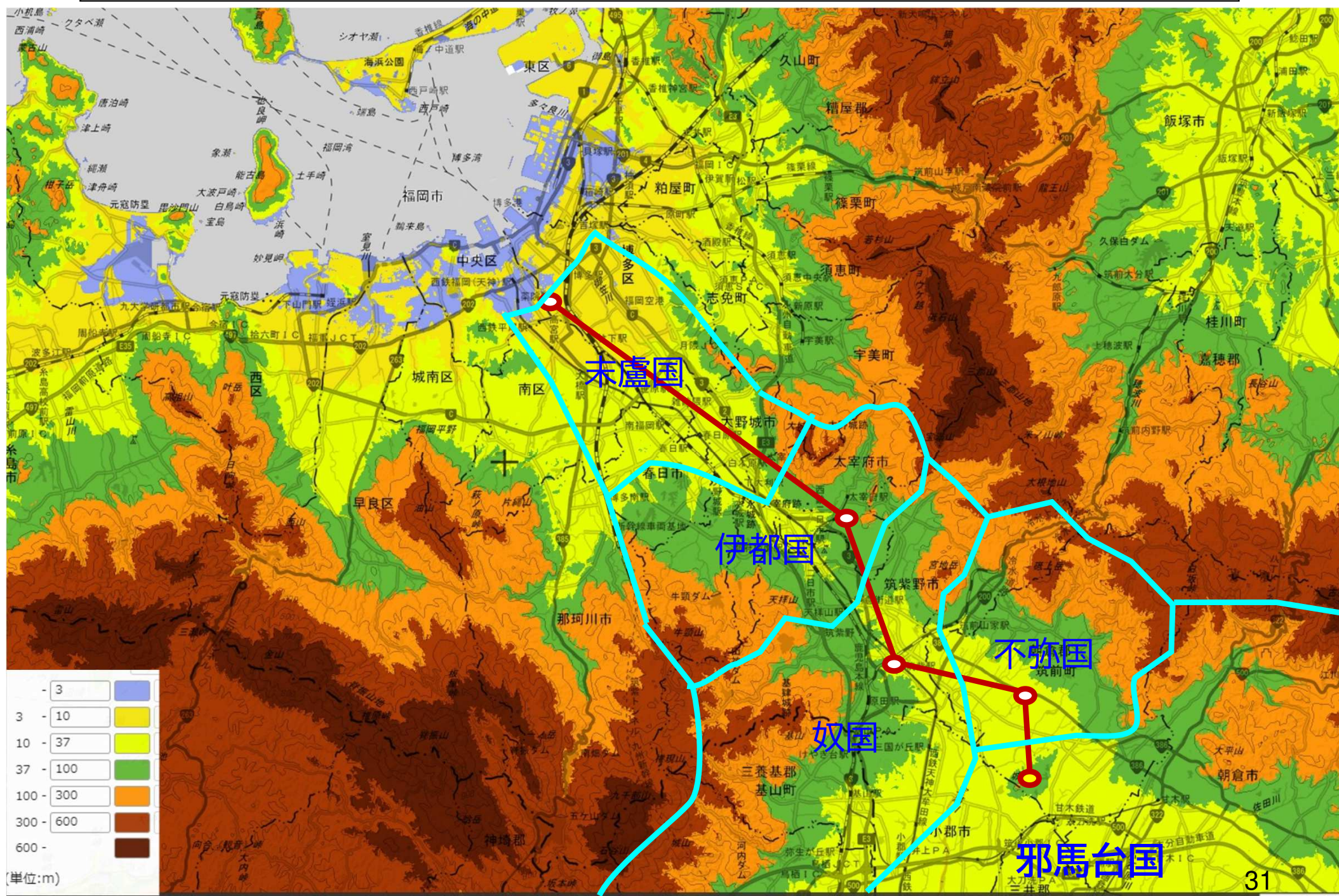
◆ 魏志倭人伝では、

- 朝鮮半島から対馬・壱岐の間を千里としており、実際の距離は約70km。
 - 単里では、千里は 77km
 - 長里では、千里は500km
- 従って、魏志倭人伝では、短里を使っていたことが明白。
- 景初元年の暦の変更と度量衡の変更通達を受けた帯方郡では
 - 暦と共に、度量衡の変更を採用した。
 - 2年後の正始元年の邪馬台国への使節団派遣も変更したままの度量衡を採用したと推定。
 - 陳寿は、その報告書を見て、そのままの里数を採用した。
 - 短里・長里の問題に気が付いていたとしても、西方の大月氏国との里数のバランスは良く、そのまま採用した可能性もある。



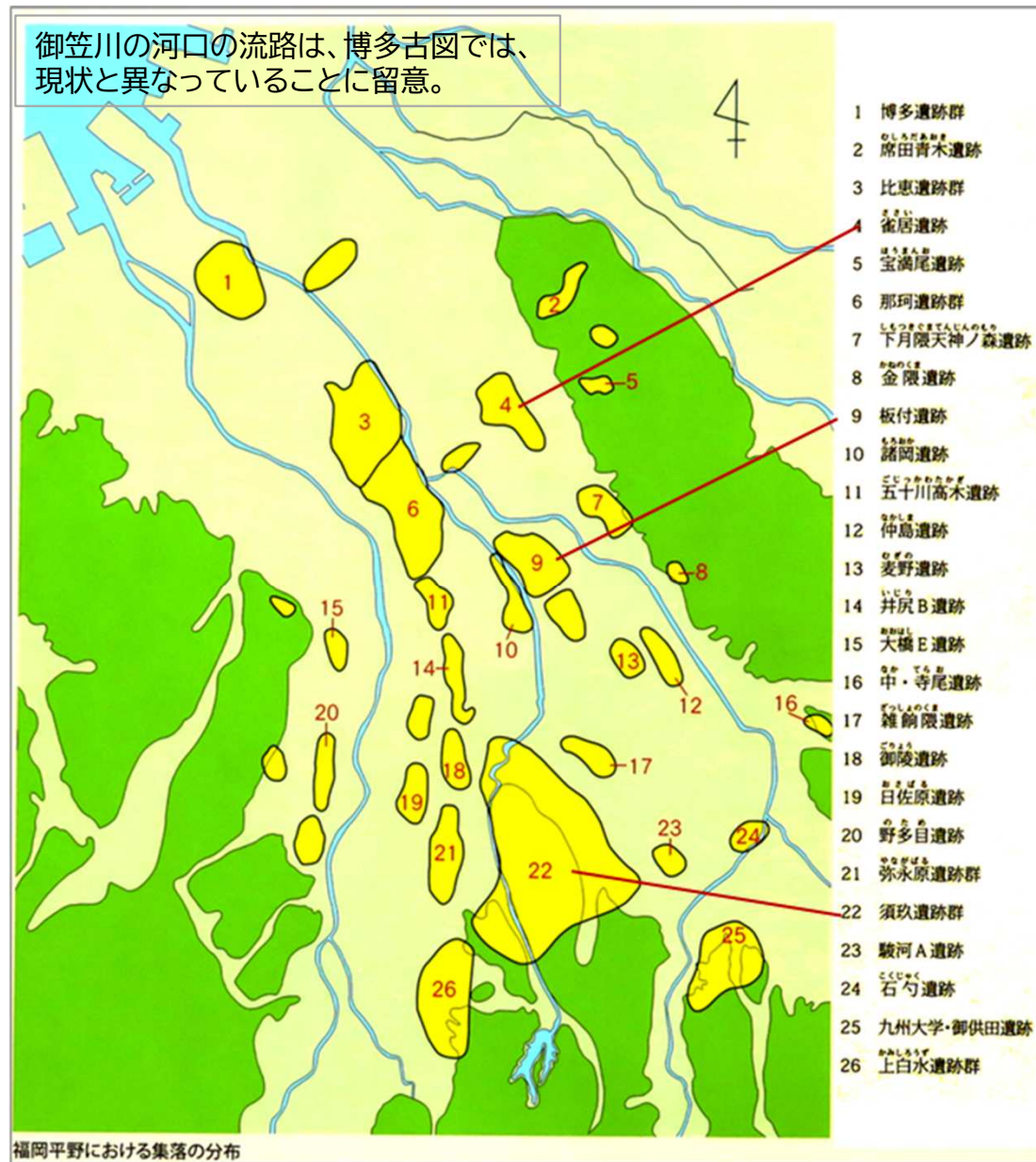
- 一大國＝壱岐からの旅程
- 末盧国
 - 又一海を渡る千余里、末盧国に至る。四千余戸有り。山海に浜(そ)ひて居る。草木茂盛し、行くに前人を見ず。好んで魚鰕を捕へ、水深浅と無く、皆沈没して之を取る。
- 伊都国
 - 東南陸行五百里にして、伊都国に到る。官を爾支(にき)と曰ひ、副を泄謨觚・柄渠觚と曰ふ。千余戸有り。世々王有るも、皆女王国に統属す。
 - 女王国より北には、とくに一大率をおいて諸国を檢察させている。諸国はこれを畏れ憚っている。一大率はつねに伊都国におかれるが、これは中国の州の刺史のようだ。
 - 女王が使を遣わして、洛陽や帯方郡からの使が倭に来たばあい、何れも伊都国の港頭で臨検し、文章や賜物を調べ、女王のもとに届けるものが、これと違わないようにした。
 - その国は、もとは男子を主としたが、七～八十年ほど前、倭国が乱れ、何年もお互いに攻め合ったので、諸国は共に一女子を立てて王とした。これを卑弥呼という。
- 奴国
 - 東南奴国に至る百里。官を兕馬觚と曰ひ、副を卑奴母離と曰ふ。二万余戸有り。
- 不弥国
 - 東行不弥国に至る百里。官を多模と曰ひ、副を卑奴母離と曰ふ。千余家有り
- 邪馬台国
 - 南、邪馬台国に至る、女王の都する所、水行十日陸行一月。官に伊支馬有り、次を弥馬升と曰ひ、次を弥馬獲支と曰ひ、次を奴佳鞮と曰ふ。七万余戸可り。

比定地した末盧国・伊都国・奴国・不彌國・邪馬台国



弥生時代の博多平野の状況

福岡市博物館 企画展示 2010年度
『**奴国**発展の礎 -クニグニがまだ小さかった頃-』



- 遺跡分布地図から見ると、弥生時代の博多平野は、初期の水田遺跡があり、前期の遺跡や中期の遺跡が多く存在する。
- 須玖岡本遺跡を中心に、青銅器・鉄器・ガラス等の工業の一大産地が生まれ、隆盛を示す王墓が遺る。
- 又、多くの戦傷遺跡もこの地域を中心に多数存在する。戦争遺跡は前期・中期・後期とある。
- 大量の青銅祭器の埋納が行われた。
- 須玖岡本遺跡群について寺沢薫氏は著書で、三世紀に集落群が次々に解体し、衰退したことを示している。
- 右の福岡市博物館の資料でも、後期には遺跡の存在は極めて限定的としている。
- 博多湾から博多平野は最も人口密度の高かった地域と考えられるが、弥生の後期(西暦240年)頃は、人口・戸数は限定されていたと推定される。
- 以下、須玖岡本の王墓・須玖遺跡群・戦傷遺跡・青銅器埋納などの図を示す。

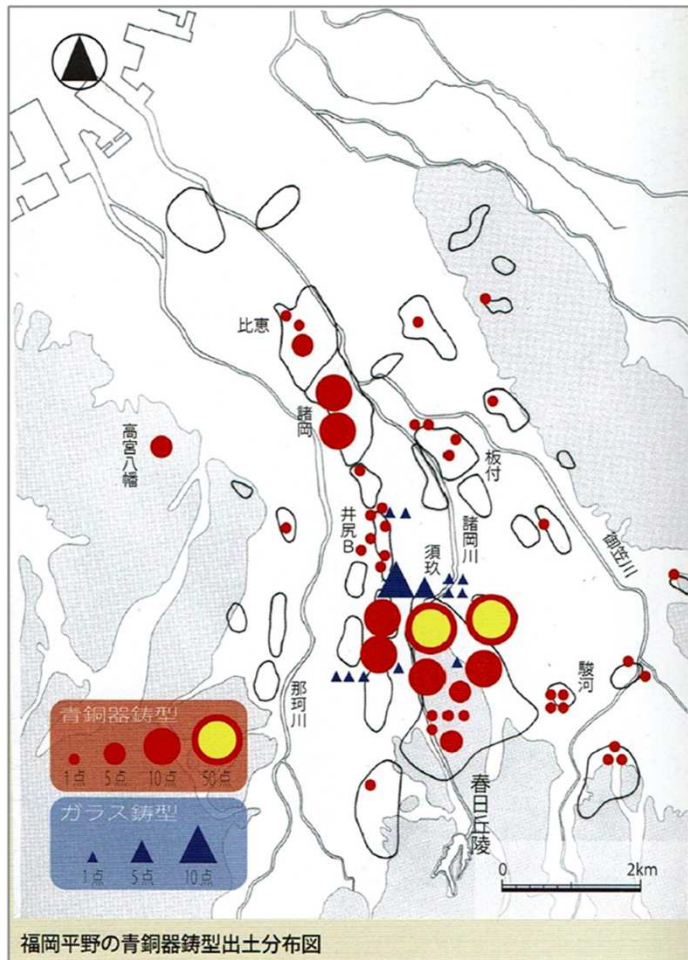
王墓

② 福岡平野

須玖岡本の王墓

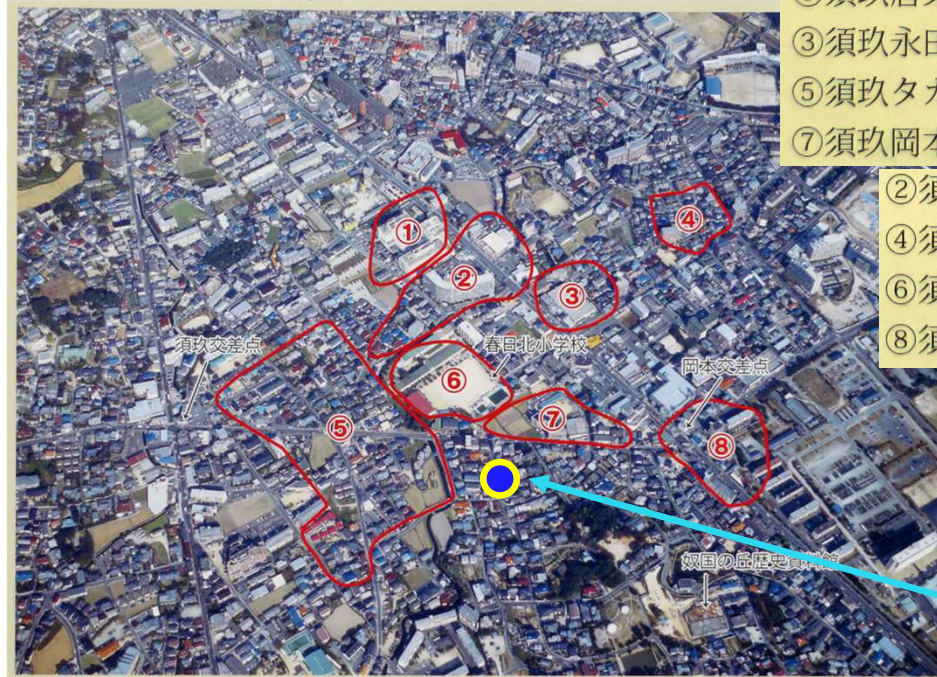


王墓の復元模型



須玖遺跡群北部の青銅器工房跡

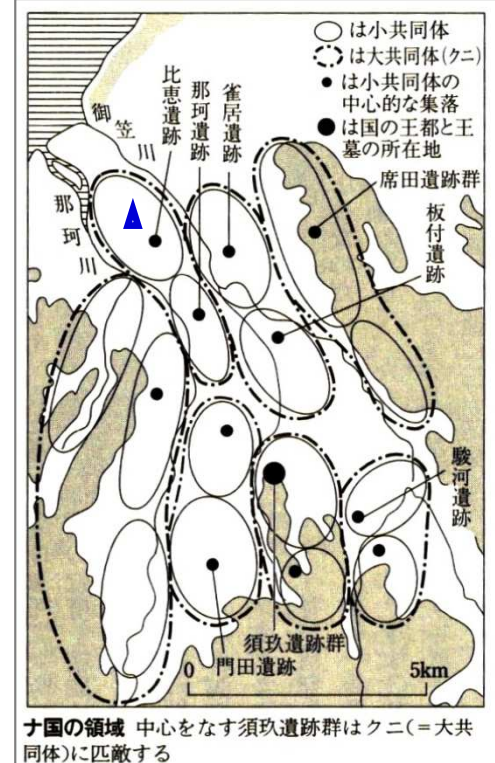
- ① 須玖唐梨遺跡 (鉄器工房跡)
- ③ 須玖永田 A 遺跡 (青銅器工房跡)
- ⑤ 須玖タカウタ遺跡 (青銅器工房跡)
- ⑦ 須玖岡本遺跡坂本地区 (青銅器工房跡)
- ② 須玖五反田遺跡 (ガラス工房跡)
- ④ 須玖黒田遺跡 (青銅器工房跡)
- ⑥ 須玖坂本 B 遺跡 (青銅器工房跡)
- ⑧ 須玖尾花町遺跡 (青銅器工房跡)



須玖岡本王墓出土地

須玖遺跡群について 寺沢薫氏の説明

- 王墓が出土した須玖岡本遺跡を中心に遺跡が密集する。この遺跡群は『弥生最大のテクノポリス』という名誉ある称号を冠されている。』青銅器や鉄器、ガラス製品が生産されていた。
- ある時期になると、様相が一変し、かつてのテクノポリスや王墓は影を潜めた。
 - 後期前葉には北に広がる低地に中心を移し、須玖永田遺跡や須玖黒田遺跡では一辺七十メートルもの方形区画を誕生させるまでになった。また、須玖唐梨遺跡と五反田遺跡では二百メートルにわたって直線的な溝が復元され、方格に地割りされた都市的な集落も想定されている。
 - しかし三世紀になると、それも次第に衰退を始めた。
- ✓ 須玖遺跡群は、最大のテクノポリスで、ナ国の首都であったが、ある時期から、凋落し、都市計画に基づいた集落に置き換わった。
- ✓ これは、戦争の結果、奴国が敗北し、占領され、その技術を戦勝国が使用し、新しい生産基地を作成したものと、解釈できる。



須玖遺跡群と「ナ」国王墓 「王権誕生」158P～

一方、ナ国の王墓はどうだろう。ナ国の中心は福岡県春日市須玖遺跡群だ。春日丘陵北半を中心とする南北約二キロ、東西一、二キロの範囲にある。丘の上には中期から後期にかけての五十カ所もの集落や墓地が所狭しと密集している。近畿でこの広さであれば、そっくり小共同体の規模だ。

だが、遺跡の密度や内容からすると大共同体(クニ)にも匹敵する。須玖遺跡群自体が都市的景観をもったクニそのものなのだ。しかもここでは中期後半以来、数々のムラで青銅器や鉄器、ガラス製品が生産されていた。青銅器の鋳型は福岡平野のじつに七割以上がここから出土していて、考古学者から弥生最大のテクノポリス』という名誉ある称号を冠されている。

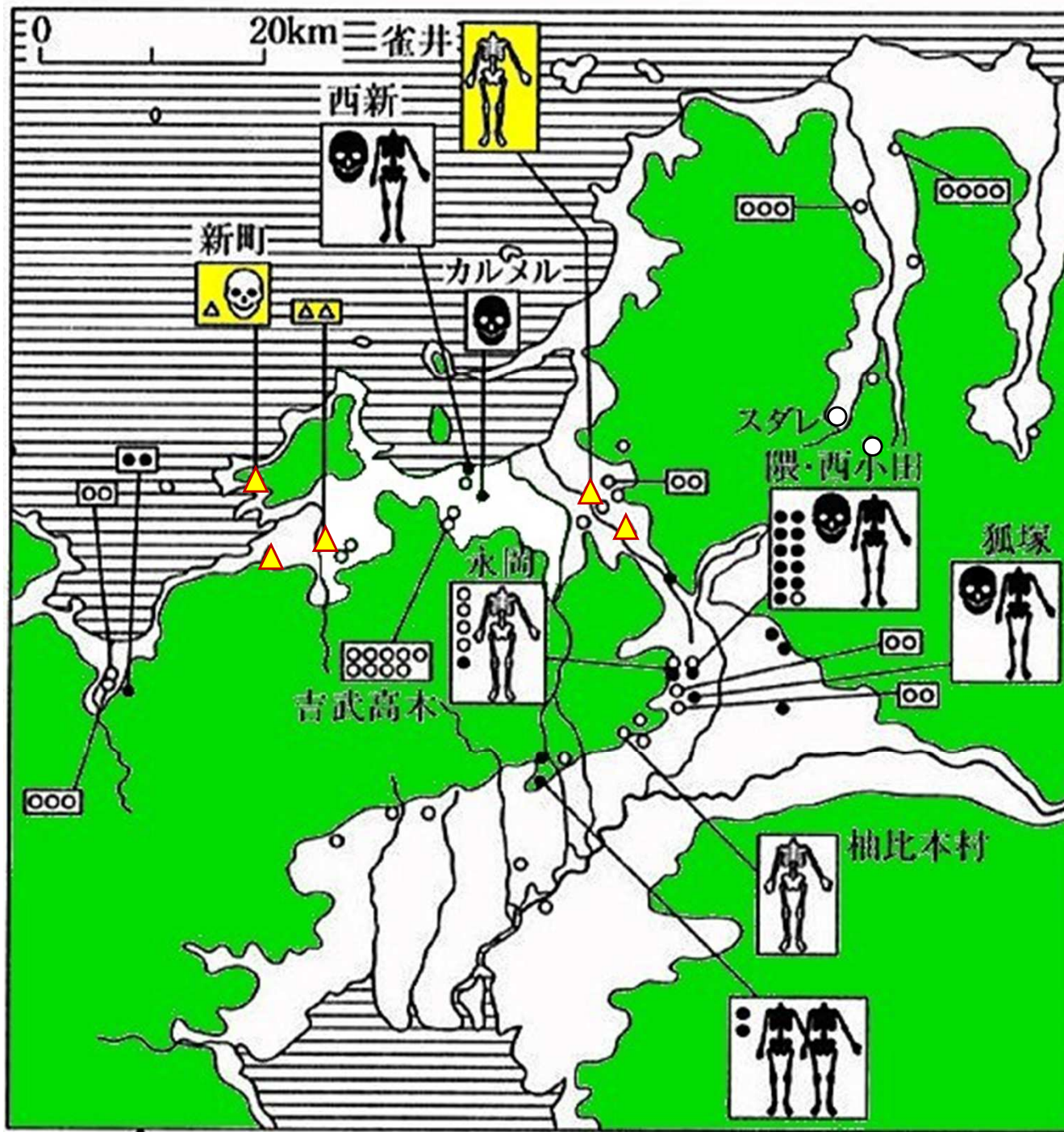
こうした先端技術集団を抱え、金属器などの集中的生産を基盤として、中期末には須玖岡本遺跡に王墓が出現した。一八九九(明治三十二)年、巨大な板石の下の大甕から前漢鏡約三十面、中細形銅矛五、中細形銅戈一、多樋式銅剣一、ガラス製壁二、ガラス製勾玉一、ガラス製管玉十二が出土した。周辺に他の大甕がないことや、現在の宅地割りの形から、ここでも大きな方形の墳丘が存在した可能性があるという。ナ国王である彼もまた、イト国王と並ぶ「王のなかの王」だったのだ。

三世紀の奴国 「王権誕生」276P～

一方奴国では、三世紀になると春日丘陵上の環境をめぐらす集落群が次々に解体し、かつてのテクノポリスや王墓は影を潜めてしまった。旧ナ国の王都だった須玖遺跡群も、後期前葉には北に広がる低地に中心を移し、須玖永田遺跡や須玖黒田遺跡では一辺七十メートルもの方形区画を誕生させるまでになった。また、須玖唐梨遺跡と五反田遺跡では二百メートルにわたって直線的な溝が復元され、方格に地割りされた都市的な集落も想定されている。しかし三世紀になると、それも次第に衰退を始めた。

旧ナ国王の威光は、王のなかの王であったかつてに比べると衰退し、国内の各オウやかつて連合を形成した他国の王との階級的格差はしだいに縮まってきたのである。伊都国とは違い三世紀の奴国は大きな転換を強いられたようなのだ。

戦傷遺跡遺跡(寺沢薫著「王権誕生」の図より、着色・修正)



寺沢薫著「王権誕生」中の戦争犠牲者の分布の北九州の図

- ▲： 縄文晩期末～弥生前期前半
- ： 弥生前期後半～中期前半
- ： 中期後半以降

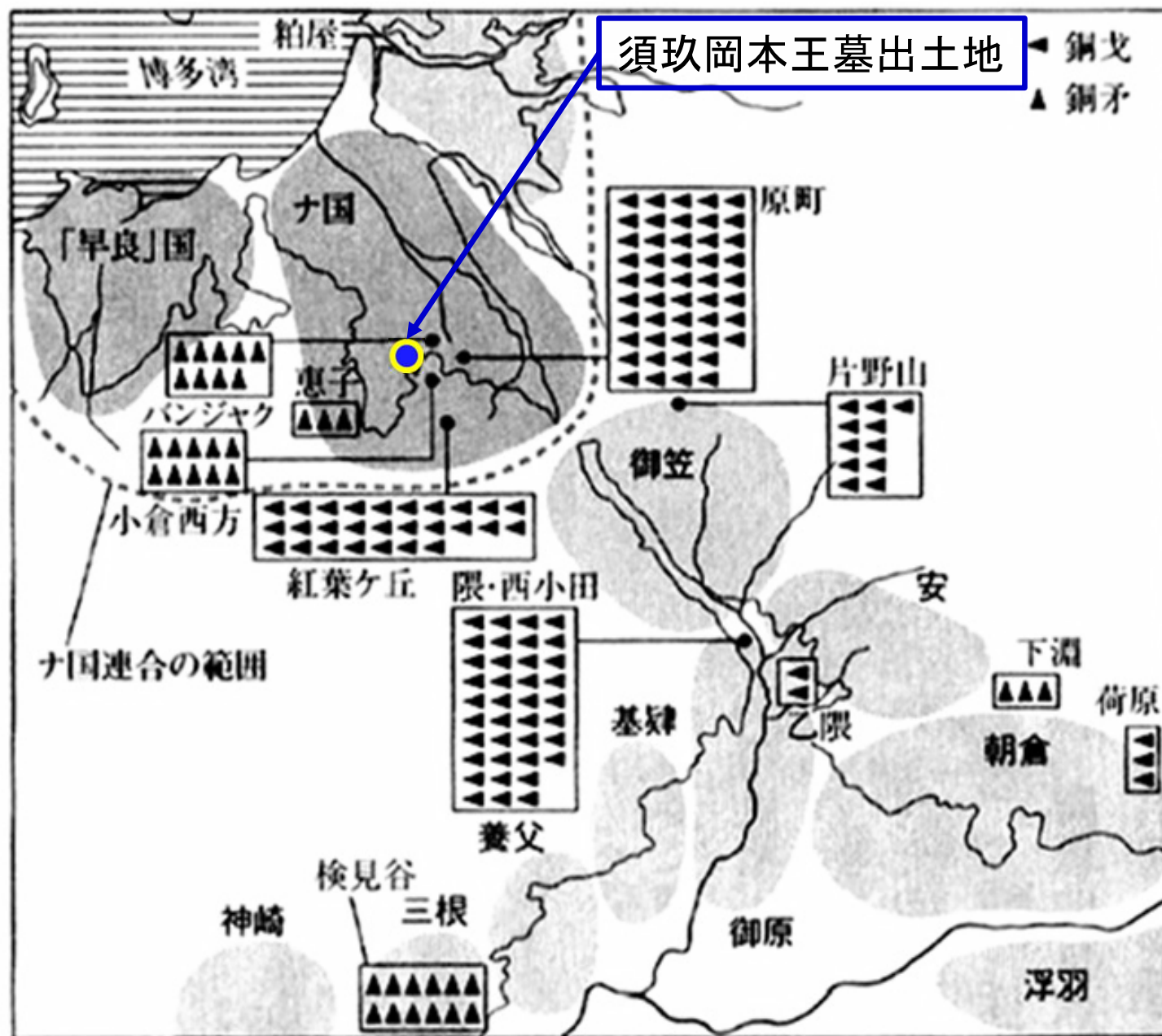
▲の弥生前期前半については、初回渡来民(西北九州縄文人)と2次弥生渡来民の戦い。

天孫族の神話に関わるのは、

- ： 弥生前期後半～中期前半
- ： 中期後半以降

遠賀川流域のスダレは、原図では●とされていたが、原資料を確認し○と修正。

須玖岡本の青銅器埋納の跡



ナ国と周辺のクニゲニの呪禁

青銅器の埋納は、須玖岡本の丘陵地帯の土手で行われた。

- ・ 須玖岡本は、青銅器の誕生の場所であると同時に、終焉の地でも有った。

埋納の解釈

戦争の勝利者側が、敗者の持っていた武器・祭祀器を、二度と使えないように人目に付かない処へ埋めたもの。

場合によっては、取り上げ、勝利の印としての故郷に持ち帰り、顕示した後に、山中に埋めた。
(左図の片野山/隈・西小田/安/下淵/荷原/検見谷はその例)

又、遠い離れた場所に居る敗者の一族が居る場合、その武器・祭祀器を、敗者の手で、山中に埋めさせた。

魏の使節の概要と条件

- 魏の正始元年の使節は
 - 大型帆船30隻以上の船団を組み、2～3千人以上の大集団で、倭国へ向かった。
 - 目的は、明帝の詔書・金印紫綬、継いだ斉王芳の詔書と授与の品物を、女王に届けること。
 - 女王国との友好関係を築き上げること。
 - 呉との関係の無いこと確認と、関係を結ばせないこと。
 - 成果としては、女王からの返礼の親書を得て、倭国の状況を記した報告書を作成し、無事帰国すること。
 - 訪問ルートは、倭の魏訪問使節から情報収集し、支援を得て、最適ルートを作成し、そのルートで訪問。
 - 倭国の途中の国々は、女王国の協力要請を受け、魏の使節を歓待。友好関係を築く。
 - 往路は、壱岐島から博多湾に直行し、冷泉津・住吉神社付近に入港。
 - 帰路のルートは倭国の助言を得て安全な唐津ルートと推定。
 - 無事に、女王国：邪馬台国に行き、詔書等を渡し、女王からの返書を得て、使命達成。
 - 予定通り倭国との友好関係を樹立し、倭国が呉と外交関係を持たないことを確認し、倭国の位置・情勢など必要な情報も入手して、無事に、魏の政府に報告で来たものと推定する。
 - 倭人伝の記述がそれを示す。
- 魏の使者は、壱岐から博多湾に直行し、入港・上陸した。
 - 唐津には上陸しなかった。
- その使節の成果を示すものとして、『女王国からの通常は有り得ない軍事支援の要請』を受け、張政を派遣し、これも無事に軍事支援を全うで来たものと推定する。
 - この支援要請は、魏にとって「倭国を蹂躪し、属国として支配することのできる絶好の機会であった」はず。
 - 朝鮮半島での韓民族の反乱の厳しさで、自国の出先機関である帯方郡・楽浪郡の存在が脅かされる状況が有り、大きな兵力を動かすことが出来ず、軍事支援に留めざるを得なかったと推定する。
 - これは、冷静に外交関係を見ると、倭国(日本)にとっては、有り得ないほどの幸運であったと云える。
 - 若し、韓民族の反乱が無く、帯方郡の兵を動かすことが出来る状態であったならば、公孫氏を大虐殺している魏軍が送り込まれ、支援を口実に、九州地方を完全支配していたとも考えられる

倭人伝の記述

- ・ 又一海を渡る千余里、末盧国に至る。
- ・ 四千余戸有り。
- ・ 山海に浜(そ)ひて居る。
- ・ 草木茂盛し、行くに前人を見ず。
- ・ 好んで魚鰔を捕へ、水深浅と無く、皆沈没して之を取る。

✓ 壱岐島から博多湾の距離は、約74kmで千里に該当。

- ✓ 方向は、東南であるが、対馬海流が有り、船は南向きだが進む方向はその向きに無い。そこで、方向を正しく記せなかったと推定。



草香江

冷泉津

上陸地

御笠川

住吉神社

現博多駅

博多古図を参考にと

- ・ 魏の使節団は、博多湾の冷泉津に入港したと推測する。
 - ・ 古図では、平清盛の港湾設備が記載されているが、建物設備は無く、この付近に上陸したものと推定。
 - ・ 地図の位置方向は、現存する住吉神社などで対応が確認できる。
- ・ 古図では、上陸地点と住吉神社の間に御笠川が注いでいる。
- ・ 魏の使節団は、冷泉津に入港し、上陸、御笠川に沿って東南方向に陸上を進んだものと推定される。
 - ・ 御笠川沿いの道には、樹木・草が生育し、夏には茂ほどだった推定され、倭人伝の記述に適合。
 - ・ 冷泉津の地形は、漁労に従事する人々が活動することが見える処で、倭人伝の記述に適合。
 - ・ 山と海の間、の浜に家が立ち生活していたとの記述もこの地形に合致している。
 - ・ 弥生時代の中期までは、非常に繁栄した地域であったが、戦争で退廃した末盧国の人口は、4千戸余りと減少していたものと推定され、記述と現状が合致している。
- ・ 待機した船団は、西側に陸地・森林があり風よけもあり、冷泉津に留まることが出来たと推定。

- 東南陸行五百里にして、伊都国に到る。
 - 官を爾支(にき)と曰ひ、副を泄謨觚・柄渠觚と曰ふ。
 - 千余戸有り。
 - 世々王有るも、皆女王国に統属す。
- 女王国より以北は、特に一大率を置き、檢察す。
 - 諸国はこれを畏憚す。常に伊都国に治す。国中における刺史の如くあり。
- 王が使者を派遣し、魏の都や帯方郡、諸韓国に行く時、及び帯方郡の使者が倭国へやって来た時には、いつも、港に出向いて調査、確認する。
 - 文書や授けられた贈り物を伝送して女王のもとへ届けるが、数の違いや間違いは許されない。
- 伊都国の中心位置は、太宰府の都府楼跡付近と推定する。
 - 伊都国の範囲は、春日市・大野城市・太宰府市・筑紫野市を含むエリア。
 - 地溝地帯で、狭い平地で、両脇に山があり、守備体制を整えると護り易い処。
 - 後の時代には、太宰府が置かれた地域を含む。
 - 太宰府は、当時は外交拠点で、博多港を管理した。
 - 大野城跡の高台に見張り台を作り、船舶の入港・出航を監視。
 - 入港時など、緊急の用が発生した時は、麓を流れる御笠川を小舟で急行する。
 - 太宰府と同様の機能を邪馬台国時代にも持たせ、港を管理したものと推定する。
 - 下流域からの軍事攻勢に対しては、後の時代に水城を設けたように、対応がしやすい軍事拠点。
 - 春日市付近は、須玖岡本遺跡など、古い王墓が存在し、王が存在した処。
 - 太宰府の北側には、香椎、新宮町、宗像市が有り、その地域が敵対行動を行った場合にも、対応可能な場所。

奴国・不彌國

• 東南奴国に至る百里。

- 官を兕馬觚と曰ひ、副を卑奴母離と曰ふ。
- 二万余戸有り。

• 旧奴国の南側

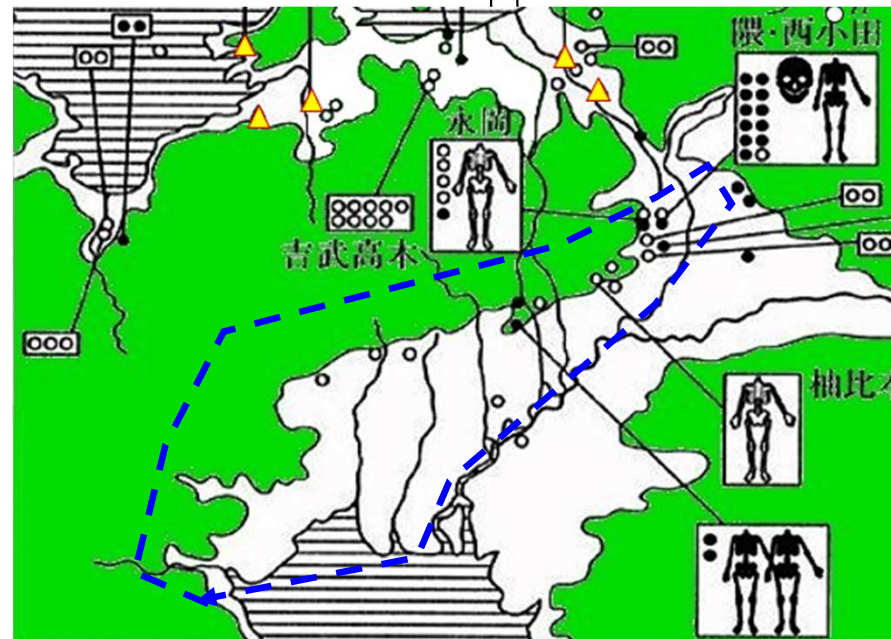
- 脊振山地の南側の地域に存在し、東南側には、隈・西小田の集落があり、多くの戦傷死者を出し、戦争に貢献した。青銅器の埋納数が多い。
- 現在の吉野ヶ里遺跡付近を含む地域広いで、戸数2万は有りうる。本来は、もっと戸数・人口も多かった筈だが、戦争の影響が残ったと推定。
- 邪馬台国を、軍事的にもサポート。

• 東行不弥国に至る百里。

- 官を多模と曰ひ、副を卑奴母離と曰ふ。
- 千余家有り。

• 太宰府の南側

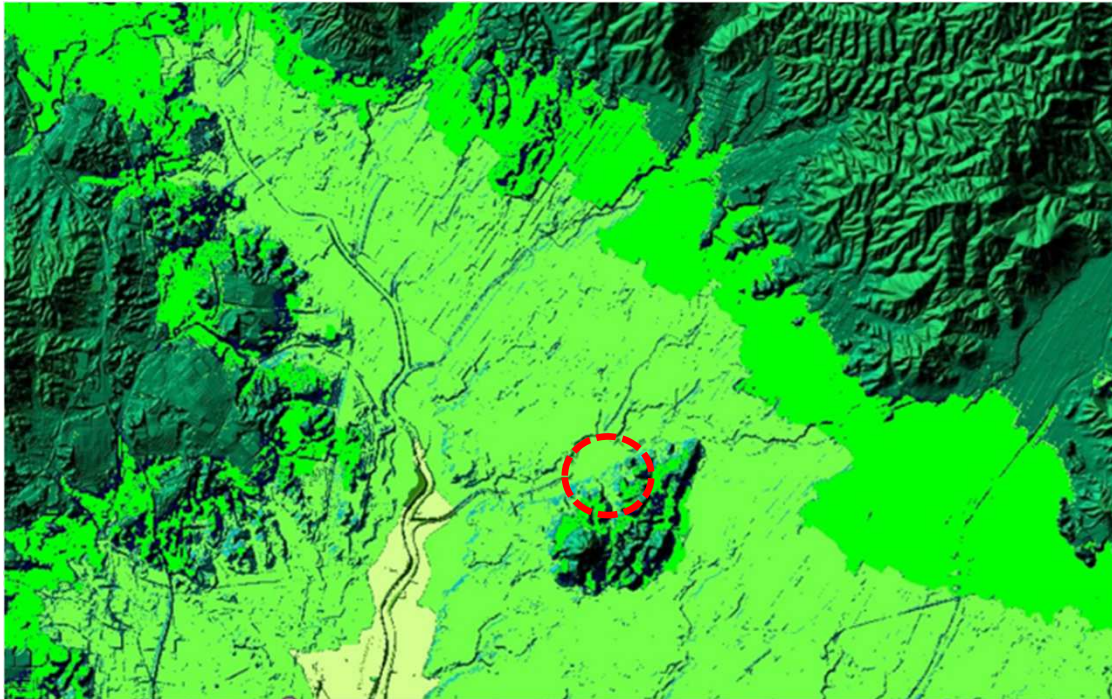
- 平野が広がり始める場所で、旧夜須町役場付近。
- 多くの戦傷死者を出し、戦争に貢献した地域。
- 青銅器の埋納数が多い。
- 戸数は少ない。



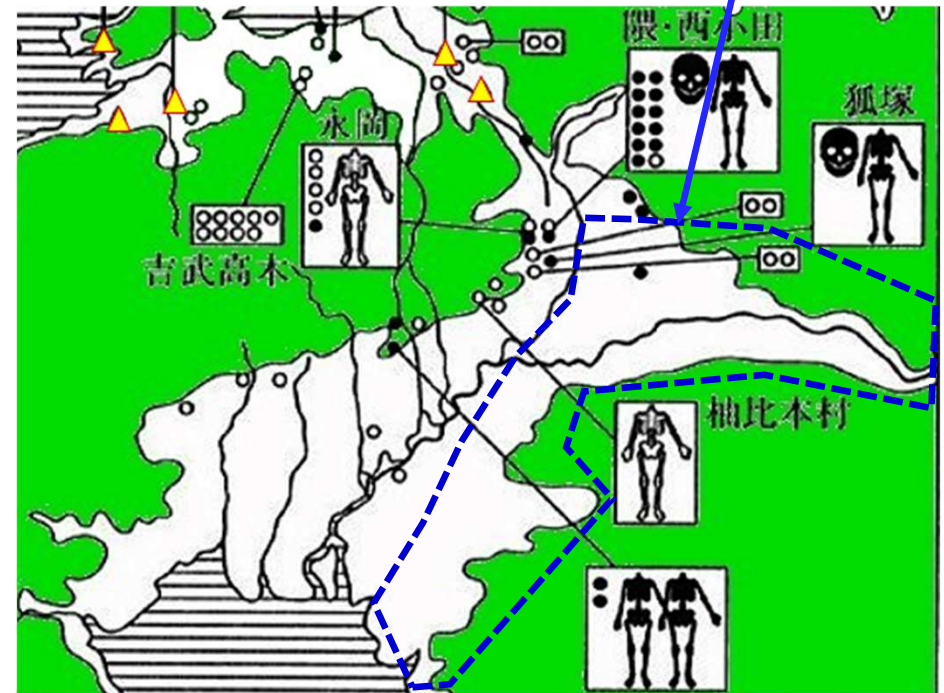
邪馬台国

- 南、邪馬台国に至る、女王の都する所、水行十日陸行一月。
 - 官に伊支馬有り、次を弥馬升と曰ひ、次を弥馬獲支と曰ひ、次を奴佳鞮と曰ふ。
 - 七万余
- 太宰府の南側
 - 筑後平野の入口に存在する城山に女王・卑弥呼の居城が存在したと推定。
 - 城山の名の通り、戦国時代に城が築かれ、地形が変わり、現状では、卑弥呼の居城の遺跡は存在しない。
 - 壺与(台与)の墓と推定する焼ノ峠古墳(前方後方墳)全長40m
 - 筑後平野の東側を占め、甘木・朝倉市、大刀洗町・久留米市などを含む広大な地域
 - 7万戸は有りうる。

女王の居城



邪馬台国の領域



- 卑弥呼は、倭国大乱の後に擁立されている。
 - その倭国大乱の痕跡は、博多平野に大量の戦傷遺跡群が有り、その影響は大きかったものと推定できる。
 - 倭国大乱は、天孫族と出雲族の長い期間を掛けた戦いと推定する。
 - この件については、下記の回に解明作業を行っている。
 - 2023/12/9 第36回「日向三代の記述の理由」
 - 2024/1/13 第37回「文献と考古資料の対応：天孫降臨・日向三代」
 - 2024/5/4 第40回「文献と考古資料の対応：出雲国譲り」
 - 2024/6/8 第41回「文献と考古資料の対応：神武東征」
 - 2024/8/10 第43回「神話時代全体・年表」
- 伊都国へ**一大卒**を置き恐れさせた北側の国々は、宗像等の旧遠賀川(出雲)勢力の国々とみる。
- 狗奴国は、邪馬台国の南方に存在した熊本を基盤とした国。



1. 「魏志倭人伝の旅程」の正確な解釈を行った。

- ✓ 旅程として、文章として矛盾の無い旅程となった。

2. 「魏志倭人伝の旅程」に基づき、比定地を選定した。

- ✓ 上陸地を博多湾とし、旅程の里程・方角に従い比定地を選定した。
- ✓ 但し、旅程の里数は短里を使用、距離バランスは合致。

3. 魏志倭人伝の記述と比定地の一致度を確認する。

- 様々な記述は、比定地毎に一致した。

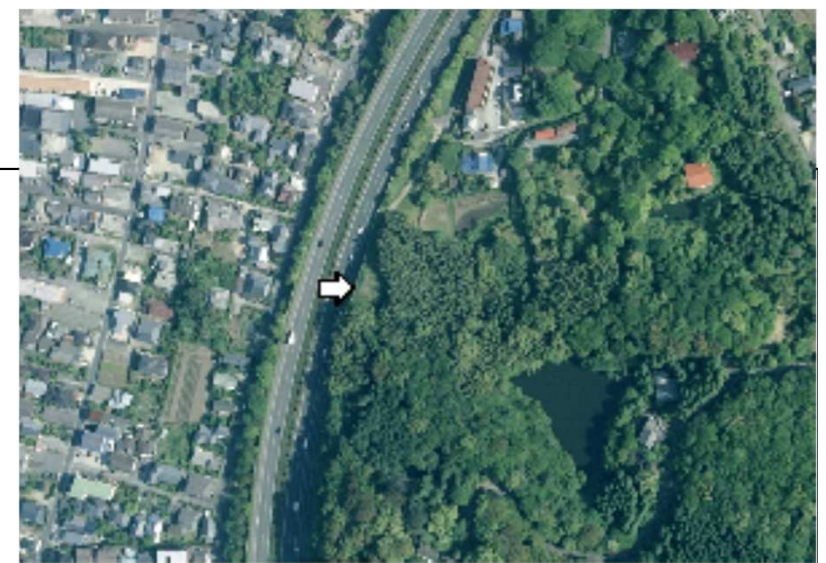
「探せない」・「読み取れない」とされた旅程は、矛盾も無く、その通りの方向・距離で目的地に到達することが判った。

従って、この博多湾上陸・博多平野を東南に進み、筑後平野に入ったと所に有る城山が邪馬台国の女王の居住する宮室であった。

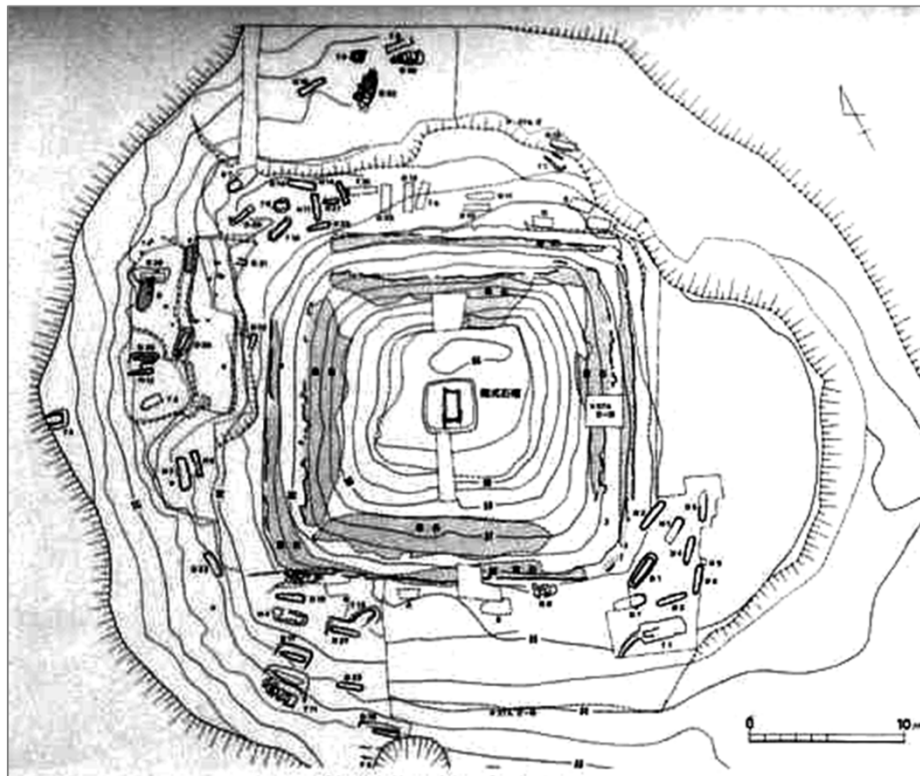
次回以降の参考も含めて、卑弥呼の墓と壹与(台与)の墓の想定地を以降に記す。

祇園山古墳

- 九州高速道建設工事で、削られたが、原型は留めた。
- 楕円形の墳丘基部(23m・32m)の上に
高さ5mの方墳(23.7×22.9m)：標高60m
- 筑紫平野を一望できる高台に存在する。
- 墳丘基部には、甕棺墓3基、石蓋土墳墓32基、箱式石棺7基、
竪穴式石室13基、不明7基の埋葬施設が確認されている。
- 殉葬者は、合計66名以上とされる。
- 盗掘を受けている。(残念ながら、金印の出土無し)



プロブ:ひもろぎ遺跡 祇園山古墳 より下の図・写真を借用



祇園山古墳墳丘測量図



主埋葬施設 と 取り囲む墓

主埋葬施設

- 墳頂部は一辺が約10mの平坦面であり、中央に箱式石棺
- 安山岩の板石を大小5枚使い、長さ約2m、幅約90cm、深さ約90cm
- 蓋と棺内は朱塗り **盗掘を受け、遺物なし。**

並葬施設(一部盗掘を免れたものあり)

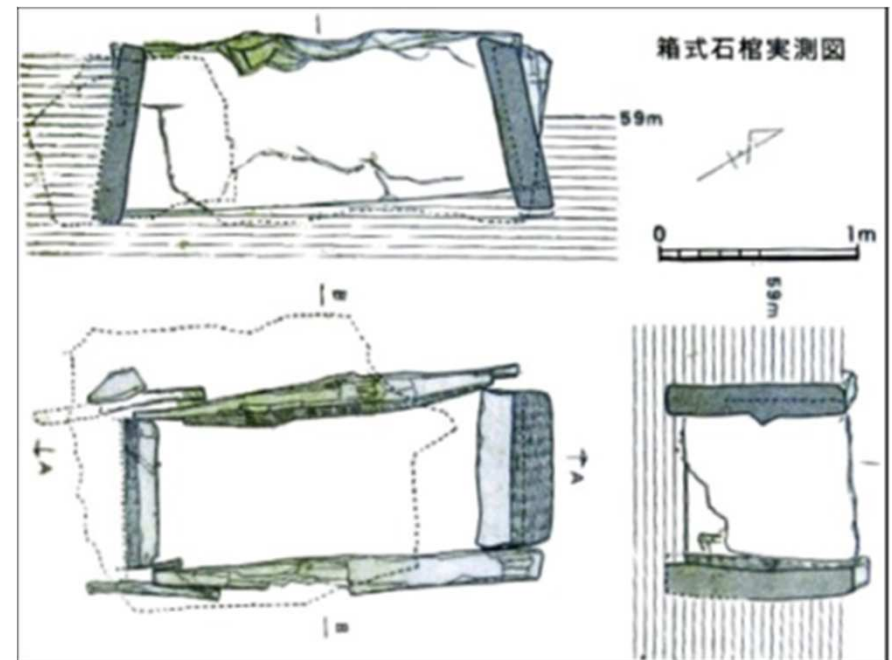
- 甕棺墓K1は成人女性人骨あり。中は朱塗
 - 鏡片、5cmの大型硬玉勾玉、2個の碧玉管玉
- 形状不明のG主体からは、刀子、鉄鏃、剣、刀身などの鉄製武器
および、鎌、錐、手斧鋤などの鉄製農機具も出土。

墳裾の各所から

- 古式土師器(西新式土器)、須恵器等が多数出土



祇園山古墳の石棺 (古賀昌子氏提供)



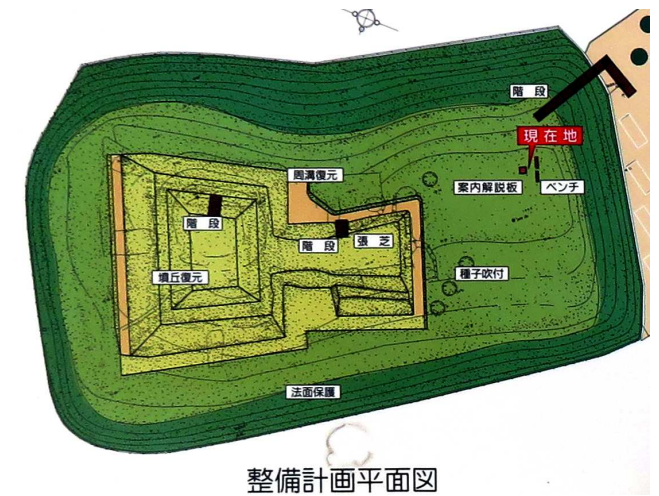
祇園山古墳は卑弥呼の墓

1. 築造時期 : 248年から数年以内 → 甕棺の種類判別から
 2. 高さ・サイズ : 盛り土の高さ5mで、径百歩に該当？
 - 短里(76m/里)を用いると、100歩は25.3m → 直系約25.3m
 - この方墳部分の長さが23mほど、楕円形の長径が32m で径百歩に該当
 3. 槨の有無 : 「棺あって槨なし」に該当？ ➡ 石棺があるが槨は無く、該当
 4. 殉葬の有無 : 凡そ100名の殉葬者の形跡？ ➡ 66名分の埋葬跡が確認された。
1か所に複数人の埋葬が有り、
土葬された場合には、
現在まで遺らないため、
100名の殉葬者が有ったと見られる。
- ✓ 魏志倭人伝に記載された卑弥呼埋葬の語句に、祇園山古墳の合致する。

壺(台)与の墓か？

焼ノ峠古墳(やきのとうげこふん)
全長38.8メートルの前方後方墳
3世紀後半(古墳時代前期)

(全長は筑前町の表記と考古学の記録と異なる)



- 福岡県朝倉郡筑前町四三嶋(しそじま)。城山から北に延びる尾根上にある前方後方墳。
- 南々東に向け、全長約40.5m、後方部は1辺23.5m、高さ約4.5m、前方部は長さ17m、幅12m、高さ約2m、くびれ部分の幅は約8.5mで、幅約2mの濠がめぐっている。後方部は2段築成で、地山を削り出した1段目の上に土盛りして2段目とし、前方部は地山を削り出したと考えられる。
- 古墳の主体部は、後方部中央に墓坑を確認。くびれ部東側の周濠付近から古式の土師器(はじき)が検出され、この土師器および立地などからみて古墳時代前期に属する古墳とみられる。
- 九州に存在する数少ない前方後方墳のうちで最大のもの